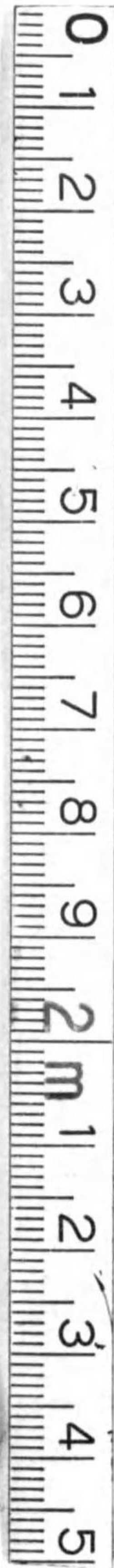


404. 9-182ウ



1200800297104

404.9
I.82
㊦



始



404 9 182ウ



104.9

I 82

⑦

全千の察想

409.9
I.82



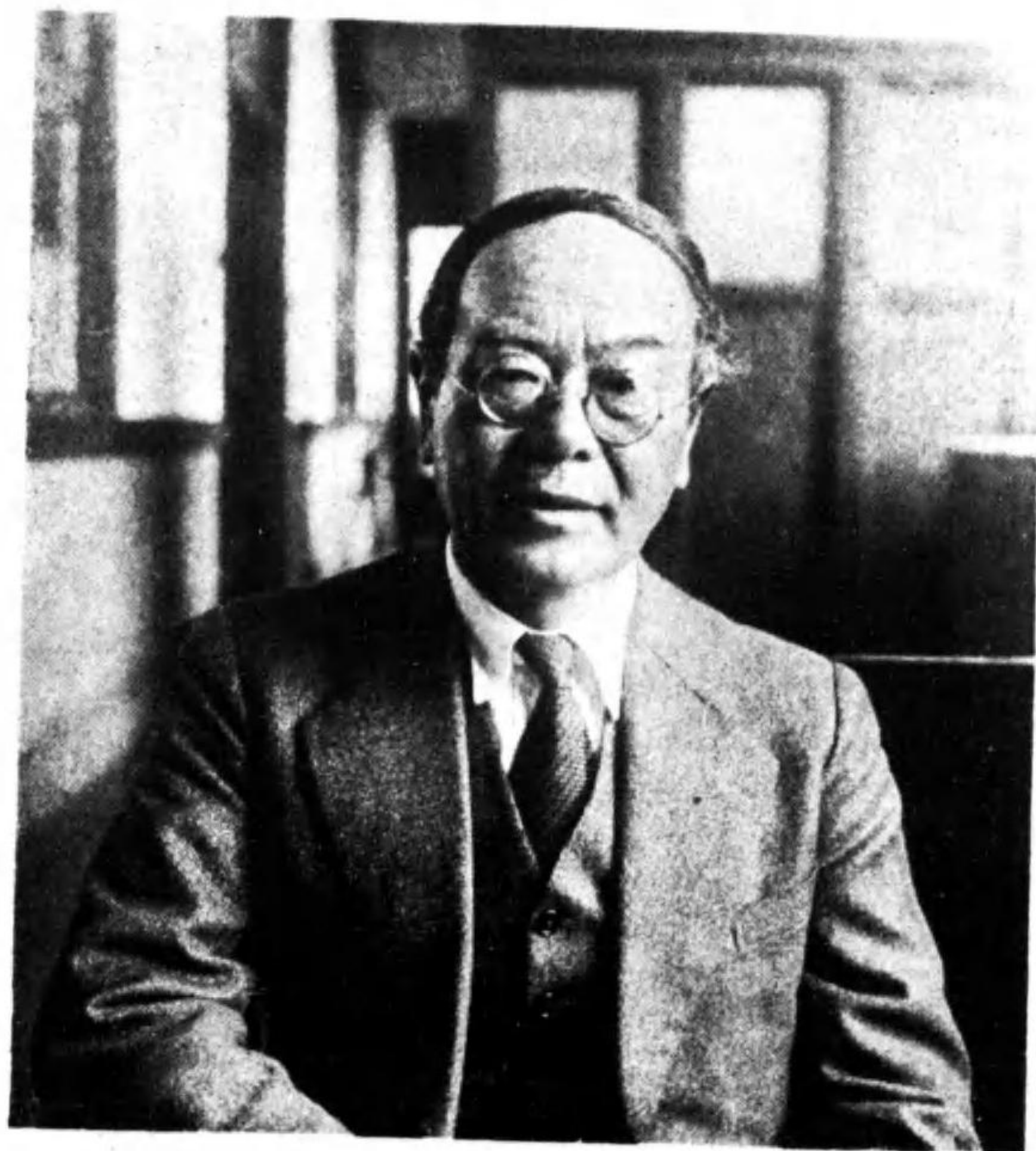
石原
純著

思索の手套

婦女界社版



1.8.82
9.1



影 近 者 著

序

本書は、私が折にふれてしるした隨筆風の文を集録したものであるが、そのなかには多少とも文學的なものや、また科學的なものを含んでゐる。文學と科學とは外見上は大いに異なつてゐるやうでも、等しく自然を對象とする上では同一に歸するのであつて、たゞその方法に於て幾らかの差異を示すに過ぎない。私はそのいづれをも深く愛してゐるので、こゝにもその兩方面を併せ載せたのであつた。尤も科學的なものとしては、主として著名な科學者の傳記をこゝに集録したが、これはかやうな人々がいかに苦心して科學を發展せしめて來たかを明らかにしたかつたからである。現在では科學の種々の應用が重要視せられてはゐるが、眞に科學を進めて新たな應用を生み出すためには、それ以前に根本的な科學理論の進展がぜひとも必要なものであり、この意味で純粹な科學を決して無用視してはならないと信ずるからである。また最後に載せた「思索の手套」と題するものは、我々が既に十數年來主張してゐる新短歌と稱するもので、これは従來の古典的な短歌に代つて今後

に大いに發展せしめたいと、我々の意圖してゐるところのものである。こゝに掲げた私の作品は固よりなほ未熟なものではあるが、併し我々としては新らしい時代に於て我々の現に使用してゐる言語形態によつて我々自らの感想をうたふのが正しい方法であると信じてゐるので、こゝにその一端を示したのに外ならないのである。従つてこの意味で讀者諸氏の觀賞を望む次第である。

本書の刊行に際しては、特に婦女界社の眞弓芳雄氏の多大の厚意に預かつたことに對して、こゝに深甚な感謝を表しておきたい。

昭和十七年十月

著 者

目 次

滿洲雜錄	一
標 準 時	一
黑龍江を隔て	四
札 蘭 屯	一〇
山に圍まれた農學校	一四
ロシア風な面影	一九
國都新京	二五
吉林の風光	二九
高勾麗の古墳	三五
鴨 綠 江	四三
地下資源	四七

荒廢せる熱河地方	三五
避暑山莊	三五
四庫全書	六三
高句麗の遺蹟	六五
昔の滿洲	六九
奉天まで	七〇
大連の夜	七三
鴉片賣房	七八
熊岳城	一一一
溫泉行	一二四
滿人部落	一二八
哲學への思慕	一三三
ヨーロッパ留學當時の思ひ出	一三六

ヨハンネス・ケプラー	一七〇
アイザーク・ニュートン	二〇二
ゲーテと自然科学研究	二五三
ルードウィッヒ・ボルツマン	二七二
マクス・プランク	二八二
日本に於ける科學の發達	二九二
寺田物理學の特質	三〇六
度量衡の問題	三三七
ことばの風格	三三八
假名と發音	三四八
言語としての日本語	三五七
日本に詩歌について	三六四

青葉	三六四
自然と人間	三六三
雨粒	三九二
騷音	三九八
椿の花	四〇四
道路についての感想	四〇七
民族協和	四一四
天才と狂人	四二二
科學と藝術	四三九
草花を愛する	四三六
或る想ひ出	四四四
思索の手套	四四九

滿洲雜錄

標準時

夏の頃滿洲へ来て、先づ妙な感じがするのは、日の暮れる時刻がばかに遅いといふことである。私が新京へ来たのは七月十九日であつて、それはもう夏至から一箇月近く経つてゐたのだが、それでも日が西に没するのは八時半頃で、だから九時を過ぎてもなほまるで暮れきらないといふ有様であつた。これは一つには緯度が高いといふことのほかに、もう一つには數年前に日本内地と同じ標準時をつかふやうに改めたのである。經度から云へば、大體一時間ばかりちがつてゐるわけであるから、それと同じにしてしまつた結果は、地方時に比べて一時間ほど早くなつてゐることになる。夏にはこれはちやうど一時

間ちがひの夏期時間を實行してゐると同じことになり、少し慣れてしまへばさしつかへないわけであるが、冬になるとどうも困るらしい。冬は日が短い上に、時刻が一時間早くなつてゐるのだから、普通の朝の出勤時刻にはまだ夜が明けきらない。そこで遅刻するのが當然のこのやうになつて、そのくせ退出時刻が延びるわけではない。かうなると問題が起つてくるので、時刻の定め方をそれぞれの土地の生活に適應させるといふ趣旨はよほど無視されてしまふことになる。そしてそれが仕事の能率にまで影響する。つまり標準時を日本内地と同じにしたといふことに、果してどれだけの利益があるのか、もう一度慎重に反省されなくてはならないのではないかと思はれる。

それと云ふのも、標準時をなぜ日本内地と同じにすることになつたのか、私はその際の改正の理由を一向に知らないのであるが、多分は形式的の統一を眼指したからではないかと考へられる。ところが、こんなことは東西に廣く擴がつてゐる國では無理になるのが當然の話であつて、そこに謂はばちつぽけな島國根性がはたらいてゐるやうな氣がしてならない。標準時などといふものは、出来る限りはそれぞれの土地の生活に適應させるのがよ

いのに違ひないので、それを無視してむやみに統一させようといふのは、形式一片の考へ方か、さうでなければ小規模な島國根性によるとしか見られないからである。さう云へば近頃では北支に行つても同じ標準時をつかつてゐると云ふし、數日前の新聞で見ると、佛印に出かけてまでも日本軍は日本時間をつかつてゐることである。佛印では二時間近い時差があるから、日の暮れきらない七時頃に、兵隊さんはもう九時就寢といふことになり、朝五時半の起床はまだ眞暗やみの三時半にあたるので、「物に動ぜぬ日本の兵隊さんもちよつと面喰つてゐる形だ」とも報じてある。なぜ、こんな不自然な統一をやらうとするのか、私にはどうしてもその意味がわからない。この流儀でヨーロッパにまで出かけたら、晝は寢てゐて夜になつて漸く起きるといふ奇妙な生活をやるより外はないであらう。

話がちよつと横道にそれたが、滿洲での日本人の生活を見ると、この事に限らず、どうも島國根性の抜けきらない嫌ひがあつて、まさに大陸に發展しようとするものがこれではいけないと感ぜられるのであつた。大概の人たちが疊のうへに坐らないと氣がすまないと見えて、御苦勞にも疊を内地から持つて行つて家のなかに敷いてゐる。かなり邊鄙な土地

の旅館へ行つても、日本から遙遠輸送されたまぐろの刺身を食膳にのぼすといふ有様である。だから値段もたかくなるし、これでは魚を食ふのか運賃を食ふのかわからないと云ふことにもなる。もちろん長い間の習慣を急に改めるといふことも、或る程度まで難かしいかも知れないが、そんなことに捉はれてゐて大陸發展がどうかうのと言はれたわけではあるまい。腰を据ゑて落ちつかうとするには、結局は土地に適應した生活を工夫してゆかなくてはいけないので、それをやらないで健康を損なふ人たちもかなりにあると聞いてゐる。そんなことは誰もが追々には氣がつくことと思ふが、少なくとも現在では島國根性が到るところに見られるのは大いに遺憾であると考へられる。私に言はせれば、第一標準時からして、昔のやうに一時間違ひのものに戻して欲しいのである。その方が遙かに地理的に適應したものであるだけに合理的であるのに違ひないからである。妙な形式統一主義やけちな島國根性は速かに清算すべきではあるまいか。

黒龍江を隔てて

七月三十一日の夜の十一時にハルビンを出發して汽車で露滿國境の黒河へと向つた。民生部編審官のI君が案内役に同行してくれた。尤も案内役と云つても、I君もこの方面には始めてゆくのみだから、土地に詳しいわけではないが、旅館への手筈やらそのほかの用事を引受けてやつてくれることになつてゐる。滿洲ではどこへ行くのにも、豫め旅館の用意をしておかないと、そこへ着いたはよいが、どこでも満員で斷られるといふ心配があるので、なか／＼面倒である。私たちは公務で出かけるといふことになつてゐたので、豫め公文書で省の公署へ通知が行つてゐるから、この點でよほど氣樂ではあつたが、それでも到着時刻を電報で知らせるやら何やら、なかなか厄介ではあつた。

翌朝早く汽車のなかで眼ざめて外を眺めると、一面に平坦な廣々とした草原で、そこに滿人が數頭の豚をつれて草を食ませてゐるのが諸處に見られる。かういふ點にかけて、彼等は實に勤勉であるやうである。平坦な草原はどこ迄行つても盡きない。北安を過ぎてだん／＼北の方へ向つてゆくと、白樺が點々として草原のなかに立つてゐるのが見られた。おまけにいろいろな草の花が今を盛りと一時に咲きそろつてゐる。黄いろい女郎花が

一面に眼界を埋めてゐる處もあれば、そのなかに濃い紫の桔梗の交つてゐる美しい眺めもあつた。そのほか名を知らないたくさんの種類の草花が自然に入り交つてゐるのだから、これはまた何とも云はれぬゆかしさである。人工を絶した自然の美しさは、どこへ行つても存在するといふことを、しみじみ感じさせられる。

ところで、こんな大草原の中にも、ぽつつりと数戸の部落があつて、住民がそこで生活してゐるのを見ると、ちよつと不思議な感じがするのであつた。その生活は殆んど他と絶縁されてゐるのであらうが、彼等は、何を好んでさういふ場處に居を定めるやうになつたのであらうか。それももちろんさほどな理由もなかつたのかも知れないが、これらを目のあたり見ると、やはり世界は廣いと感ずるのであつた。そんな生活の中にはひり込んで、いろいろ有様を調べることができたなら、おもしろいこともあるに違ひないと思ふが、それはなかなか手輕には出来ない事からである。

草原の諸處には、廣い湿地帯がかなりにある。それが水を増すと、鐵道線路を浸して土を崩してしまふので、屢々汽車が不通になる。現に私たちの便乗する前日迄はこの線路も

不通であつたので、それをやつと修理して、この日は汽車が通るには通つたが、諸處で工事が引續き行はれてゐて、さういふ場處へさしかゝると、汽車は牛の歩みよりも遅くなつてしまふ。いかにも危なげで、乗つてゐても氣が氣ではない。そんなわけで、黒河着は二時間餘りも遅れてしまつたが、この線ではそれも珍らしいことではないとの話であつた。

清溪といふ處から北へ進むと、多少の起伏のある山地が少しづつ。この邊りから孫吳や瓊瑛にかけて、防備施設を行つてゐることと、汽車の窓のブラインドをおろすのだが、これは却つて逆効果を生じはしないかと思はれるのであつた。つまり普通の素人が眺めたところで、どんな施設かわかるわけでもないのに、特別に眼隠しをするといふのは、この邊りが重要な地點だといふことを知らせるのに過ぎないことになるからである。

黒河へ着いたのはその日の八時過ぎであつたが、こゝへ來ると、さすが北緯五十度を超えてゐるので寒さを感じるほどであつた。豫定の旅館は支那家屋の内部をいくらか造りかへたやうな風の建物であつたが、それでやつぱり部屋部屋には畳を敷いてゐるのだから、益々妙である。

翌日は先づ省の公署へ行つて、省次長からいろいろ話を聞いた。黒河省の面積は朝鮮全土の半分ほどもあるのに、人口は八萬程しかないといふこと、それで開拓民がぜひ必要なのだが、まだ幾らも居ないといふこと、それから黒龍江沿岸警備のことやら、そのほか大分おもしろい話やいくらかの氣焰なども聞かされた。沿岸警備隊は江岸の諸處に離れて置かれてゐるのだが、黒龍江が凍つてしまふと、そこへの交通はまるで杜絶してしまふので、その前に翌年の春までの食料やその他の必要品をとりまとめて船で送ることになつてゐるが、殆ど半年以上さういふ場處に閉ぢこめられてゐる隊員たちはまるで世間の眼界の外にあるので、それらの人たちをこそ、出来る限り慰問してやらなくてはいけないと、しみじみと語られたのは、いかにも本當で、なるほどかういふ土地へ来て見なければその實情がわからないことも十分に感ぜられた。

黒龍江の江岸に出て見ると、すぐ向ふ側にブラゴエシチェンスクの町續きの建物がたくさんに眺められる。そのなかで軍司令部の大きな建築などが目立つてゐる。望樓へのぼつて双眼鏡を覗かせてもらつたが、人馬の動きが手に取るやうに見える。河幅はこの邊で八

百メートルに過ぎないので、肉眼でもかなりに見えるわけである。その間を河水は無心に流れてゐるのに、これが國境だとなると、ふしぎな緊張がそこに湧いて來るのだから、まことに妙である。私たちが望樓でのぞいてゐるうちに、滿人の漕いでゐた筏が向う側に引きよせられてゆくのが見える。かういふ筏は河上で伐り出した木材を流して來るのであるが、河幅の中央を超えてもすると、早速向うへ引きよせられてしまふ。この邊りでは河の流れぐあひで、さういふことがかなり頻繁に起るといふことであるが、木材の値段が近頃は騰つてゐるので、筏を一つ取り上げられると數千圓の損害になるさうである。筏ごと連れてゆかれた滿人は半月もすると歸されるといふ話であるが、木材の損害は帳消しにはされない。向う側へ流される恐れのある場處では、なぜ筏を小蒸汽でもこちらへ引かせるやうにしないのか、こんな話を聞きながら私たちは聊か不審に感ずるより外はなかつた。望樓を降りてから、江岸でロシヤ料理の御馳走になり、それから町外れの農業學校を訪ねて、生徒の實習など見せて貰つた。周圍の草原の花がこゝでも餘りに美しかつたので、それを採集して持つて歸つたのはよいが、歸りがけに自動車を或る處で待たせておいた間

に、草花をそこへ残して置いた儘で自動車に歸られてしまつたので、これはとんだ失敗に終つてしまつた。

その翌日は再び長い汽車の旅をしてチ、ハルに向つたのであつたが、あの國境としての黒龍江の印象が妙にいつまでも頭に残つてゐた。

札 蘭 屯

黒河を朝はやく出たのだが、その日の夜十一時に漸く齊々哈爾に着いた。途中北安で汽車を乗り換へなくてはならないので、その前に汽車が遅れでもすると、この連絡が出来なくなると云ふことであつたので、大いに心配したのであつたが、これは辛うじて間に合つた。尤もそれもこちらの汽車が出發を三十分ばかり遅らしたからなので、それでもともかく連絡が出来たのは幸ひであつた。さうでもなかつたなら、或ひは北安で旅館を探しかねて立往生するところであつたかも知れない。

齊々哈爾では、驛の構内にある鐵道ホテルに泊つた。この町は昔馬占山の占據してゐた

ところであるが、その城内や、それを取り圍んだ市街は驛からはかなり遠く離れてゐて、中門にはまだ空地がその儘に残されてゐる。

西側に嫩江といふ河流があるので、春さきに蒙古風の吹く頃には砂をひどく吹き上げてまるで眼もあけられないさうである。郊外の河流近くに、商科と工業との國民高等學校があるが、これは馬占山時代につくられた建物をそのまま使つてゐるので、實に奇抜な恰好をしてゐる。

部屋が一行に並んでゐるのはよいが、それが一邊百六十メートルの長さをもつた四邊形をつくつてゐて、その内側にある廊下には圍ひも何もないから、この邊りの嚴寒にはそこを歩くだけでも、かなり酷いらしい。おまけに今では建物がすっかり古びてゐて、一部の屋根瓦などまですり落ちてゐる處などもあり、寧ろ危険なありさまである。ところがこのなかに生徒の寄宿まで設けられてゐて、平氣でそこに起居してゐるのだから、考へてみれば少しく氣の毒でもある。だが、生徒たちはさすがに鈍感で、寄宿のなかなど厭な臭ひのするのを一向氣にもかけずに平氣で過ごしてゐるらしい。それにしても驚いたことには、

この四邊形の中庭に砂がうづだかく積つてゐるのが蒙古風の頃にたまつたものだとのこと
で、これでもさき頃生徒たちの勤勞奉仕でそれを取り除けた残りなのだと言明されたのを
聞いてゐて、いかにその頃の砂ほこりの烈しいかが想像されるのである。

この學校の近くにもう一つ農業の國民高等學校があるが、この方は古い寺院を使用し
て、その内部を少し改築したものである。周圍に樹木の立てこんでゐるのはよいが、本堂
の階上に理科の標本などが詰め込んであるのを見ると、之も滿洲でなくては見られぬ姿で
ある。その天井裏には燕がたくさんに巢をつくつてゐる。燕はかなり北の方まで來るもの
だといふことを、こゝで私は始めて經驗した。周圍に廣い農場が設けられてゐたが、大部
分は草原のまゝに残されてゐた。

一日を齊々哈爾で過して、その翌日の朝西の方の札蘭屯じらん屯へ向つた。昂々溪で乗り換へ
てからは、昔のロシア時代に使用された古ぼけた客車をそのまゝ使つてゐるので、頑丈に
出來てゐるが、ひどく搖れて、うつかりすると頭を後ろにぶつけさうになる。この邊から
は蒙古風の地名が多く、成吉思汗などといふ驛もある。どんな處かと思つて見ると、ほん

の小さなさみしい一部落に過ぎなかつた。それを過ぎると、今まではまるで平地であつた
のに引き換へて、多少の起伏が現はれてくる。つまりここからが興安嶺にさしかゝるわけ
で、札蘭屯といふのは謂はばその入口にも當るのである。ちやうど晝頃そこへ着いた。

札蘭屯は北滿の避暑地としてその名が知られてゐる場處だとのことであつた。尤もこの
邊では避暑と云つたところで、さほど堪へ難い暑さのあるわけでもないが、この地はとも
かくも山に圍まれてゐて、美しく澄んだ河水の流れてゐることなどがいかにも氣もちがよ
いので、遊覽に適するからであらう。興安東省の首都ではあるが、町のなかの到る處に樹
木が多く、その間にぼつりぼつりと家が立つてゐると云ふ有様である。往來する人と云つ
てもごく少なく、至極のんびりした町である。なるほどよそから氣晴らしに來るのはよさ
さうな處であるが、始終こゝに住んでゐる人たちには何の刺戟もなさうに見える。

このやうな場處でさほど見るものもないと云ふ話であつたが、ともかく町はづれにある
師範學校まで行つてみる。師範學校といふのは内地の師範學校に相當するものである。こ
の町にも蒙古人はかなり多く、生徒のなかにも蒙古系のものが大部分を占めてゐるの

で、学校の入口にも蒙古文字で標札が記してある。校長も蒙古系の人であつたが、日本語がかなりに達者で、この邊のいろいろの事情などよく話してくれた。学校に設備のないのが何よりも困ると云ふ。それで理科教授なども教科書を説明する以外方法がないとのことであつたが、それは今ではなほ滿洲國一般に通ずる有様でもあるやうに思はれる。

歸りがけに少し家続きの町の傍で、なにやら多勢の詰めかけてゐるのが眼についたので、あれは何かと尋ねると、講談のやうな物語りをやつて人を寄せてゐるのだとのことであつた。こんなのがこの町でのせいぜいの娛樂なのであらう。夕方旅館に歸つたが、こんな場處でも旅館が不足らしく、それだけに不親切な待遇を平氣でやつてゐる。風呂などは釜を修繕に出してゐるから當分だめですと云つてすましてゐるのだから、呆れて物も言はれない始末である。

山に囲まれた農學校

翌日は省公署からトラックを出してくれたので、それで郊外に出かけた。山に囲まれた

間を河流のうねつて流れてゐる景色がいかに美しい。その間に道は山を登つて行つて、その高い頂上からの眺めはまたひとしほである。河流の曲線が地圖にゑがいたやうに見下ろされるので、かういふ場處へ来て説明すれば何よりもよく河の曲りがたがわかと、地質學者のI君が言ふ。この山を向う側へ超えてしまつた處に、幾らかの平地があつて、その遙か彼方に小さな建物が見える。あれが農學校だと云ふことであつた。

併し農學校などと云つては、およそふさはしくないほどの小さな建物であつた。平地の周囲はぐるりと山に囲まれてゐて見渡す限りこの外には何もないのだから、いかにも人里離れた感じがする。その傍まで行つたトラックの音を聞きつけて、眞つ黒に日に焼けた年の若い先生が一人ぼつとりと出て來られた。この人に學校のこととていろいろ聞いた。教師は自分ともう一人の二名の日本人だけで、生徒は今では休暇で歸宅してゐるが、蒙古人が十名ほど居ると云ふ。實習を主として農作物をつくらせてゐるが、これだけの生徒ではひろい土地をどうすることもできないとも話された。それでも附近にはいろいろな作物が植ゑられてゐるし、立派な牛や馬も飼はれてゐた。こんな場處にゐてさみしくはないかと尋

ねれば、今ではもう慣れてしまつて、この仕事は何よりも楽しく感じられるやうになつてゐるから、町などは一向に出たいと思はないと云ふ。私はさういふ言葉を耳にして、本當に心から感動した。滿洲でいろいろの學校を見てまはつたが、これほど印象の深い處はなかつたと言つてよい。民族協和とか何とか云つても、このやうな眞摯な人々の心の底からの實踐に依らないでは、本當の仕事は出来ないのだといふことを、しみじみと感じさせられた。涙ぐましいばかりの氣持ちで、併し實に朗らかなこの先生の顔を、私はじつと見守らないではゐられなかつた。

校舎のうしろの小高い山に上つて見ると、また向うに幾つかの山が續いて見える。もう一つあちらの山までが學校の土地になつてゐるとのことであつた。この邊りも一面に珍しい草花が今を盛りと咲きそろつてゐる。私はそこでその一つ一つを摘んで、記念に持つて歸つた。

それから再びトラックに乗つて、左手の方の山を超えてゆくと、そこには鐘紡の經營してゐる牧場があつた。少しはなれた處では煉瓦を焼いて、それをすぐに建築用に使つてゐる。

る。滿洲の土は大概の處では粘土質であるから、それで煉瓦を焼けるので至極重寶である。民家などもかういふ土を固めて壁から屋根までもすつかりそれでつくられてゐるのが澤山にある。尤もこの邊では雨量が比較的に少ないから、こんな土の家でも間に合ふのであらうが、人間はやはりそれぞれの風土に應じて適宜な施設を考へ出すのだといふことが、これでもわかる。しかし道路などは粘土質であるだけに、ちよつと雨でも降ると、べとべとと濕つて始末がわるく、天氣續きで乾くと砂ほこりが立つて、これも困ることになる。一利一害は免がれないといふ處なのであらう。

晝過ぎに札蘭屯へもどつて、省公署での座談會をすまし、汽車の出發時刻までのちよつとした時間に、ロシア人の喫茶店にはひつて見る。小さな店だが、なかなか小奇麗に氣の利いた裝飾を施してゐる。話に聞けば、そこで商ふパンやロシア菓子などもすべて自分たちの手でつくると云ふことであるし、バターなども牛を飼つてその牛乳から製してゐるのだとも云ふ。かういふことにかけては、ロシア人は實に摯實に、しかもなかなか合理的に事を行つてゐるので、さういふ點では大いに學ぶべき處があると思はれる。

話がちよつと横道にされるが、私はそれにつけても新京博物館の藤山一雄氏の調査されたロマノフカ村に關する記述を思ひ出さないわけにゆかなかつた。この村は濱綏線の柳樹信號所附近にあるとのことであるが、そこへ數年前にロシアの農奴たちが漂浪して來て、適切な場所を選んで二十六戸の村を建設し、農牧と狩獵とによつて全く自給自足の生活を營んでゐるので、それらの家屋の配置や構造や、家屋内のあらゆる設備が簡素のなかに、いかに合理的に科學的に考へられてゐるかを、藤山氏の筆はよく記してゐる。家屋のみでなくあらゆる家具、道具類までも自分たちの手で製作し、冬季煖房用のペチカや、食料貯藏所までも設けられ、蜂を飼つて蜂蜜や蜜蠟をとり、水車小屋までつくつてタービン式の水車で小麥を挽いて居り、そのほかシベリヤ風呂が三箇所に設けてあるさうである。家は生木の楊樹や白樺で造られてゐるが、それらを横に積んで組み立てるので、柱がないから、やがて乾燥しても隙間が出來ないといふのである。しかもそれほど簡素な造りででありながら、内部は十分に暖かくしてあつて、嚴寒の候にでもゴムの樹のやうな熱帯植物が室内では平氣で冬を越すとのことである。それに傳統的な彼等の篤い宗教心と藝術味の豊か

な感情とによつて氣持ちのよい、しかも、敬虔な裝飾が工夫されてゐることなども、藤山氏は記してゐる。勿論、このやうな生活型態は彼等ロシア人の故郷に於けるものをその儘移して來たのには違ひないが、それにしてもよく自分たちの手でこのやうな異郷に漂浪して來てまでもその生活をきり開いてゆく努力に至つては、大いに見倣ふべき點があるのは確かである。藤山氏は之を日本移民の生活と對比していろいろな苦言を述べても居るが、移民たちが種々の點で反省の必要であるのは恐らく確かな事柄であらう。私は直接にはこれらの開拓村を見ないで來てしまつたが、いろいろな人たちの話を聞いてもさう感じないわけにゆかないのである。

ロシア風な面影

滿洲のなかで特別にロシア風な雰圍氣を匂はせてゐる都市はハルビンであることは、誰も知つてゐる通りである。私は嘗て明治四十五年にヨーロッパに留學に赴く際に、ウラジオストックから國際列車でシベリヤを旅した途次、そこを通過したのであつたが、

その頃のハルピンは純粹なロシア町であつた。今ではそれとはかなりに趣きがちがつてはゐるが、それでも昔の建物が多くその儘に残つてゐるから、そこに既にロシア風な面影を感じられるのである。そして諸處にカトリックの寺院がそれぞれの特異な姿をもつて立つてゐるし、殊に名だかい中央寺院は町の中心にあつて一際眼立つてゐる。ロシア人墓地などもこゝでなくては見られぬ風趣を示して居り、それに商店街以外には樹木の非常に多いのもいかにも氣持がよい。

札幌からの歸りがけに私はこゝに立ち寄つて、五日間滞在したのであつたが、ともかく他の都市とはよほど異つた氣持を味へるだけでも好ましかつた。今ではこゝで生活してゐるロシア人の數もすつと減つてゐるのであるが、それでもこの街路を歩いてゐるのには、その中の幾たりかには出遇ふといふ程度にはなつてゐる。併し店でも經營してゐるのはよいが、普通のもものは随分生活には困つてゐるらしい。ところがそれでありながら彼等の住宅のなかなどは實に小綺麗にとゞのへてゐるのには誰でも感心するといふ話である。それにつけても考へて見ると、概して西洋の人たちは自分たちの生活を楽しくする方法をいろ

いろ工夫してゐる。支那や滿洲の人たちでさへも、地方などで實に原始的と云つてもよい程の低度の生活をしてゐながら、小鳥や家畜を愛して、それを飼ふのをこの上もない楽しみとしてゐるといふことである。さういふ點に於ては我々日本人は少なくとも近頃では生活そのものの楽しみを最も少ししかもつてゐないのではないかと、或る人は話してゐたが、或ひはそれが事實であるかも知れない。ともかくさういふ事柄は一應問題として考へてみてもよいのであらう。

ハルピンでも、私はいろいろな學校を見廻つたが、そのなかには昔のロシア時代につくつた建物をその儘使用してゐるのが多く、機械などもその頃のものがたくさん残つてゐる。工業大學にある蒸氣機關の模型などは實に巨大な立派のものであつた。そして熱力學の方面では相當にすぐれたロシアの學者がこゝに在職してゐたと見えて、いろいろおもしろい機械も残つてゐるやうであるが、それらがさほど活用されずにあるらしいのは惜しい氣がした。また民族的な習慣のちがひなども、お互ひに比べて考へるとなかなか妙味があるので、鋸なども日本では向うから手前へ引いて來るのに反して、ロシア式のものはこちら

らから向うへ押してゆくやうになつてゐる。支那や滿洲でもそれと同じだといふ話であるから、之などは何でもないことでありながら、やはりどこかに文化の起原の相異をもつてゐるのかも知れない。

學校のなかでもおもしろかつたのは、ロシア人のみを入學させる小さな女學校の有様であつた。ここではロシア人の校長からいろいろ話を聞いたり、寫眞帖を見せてもらつたり、生徒の描いた統計表についての説明をも聞いた。この統計表には統計對象を畫で示してあつて、例へば人口統計などには、各國人の特徴のある顔が描いてあつたが、それが實にうまく出来てゐるのには感心した。事務をとつてゐるのには、以前の帝政時代に砲兵少將まで勤めた人だといふことで、體格のがつちりした人物であつた。教室のなかには必ず正面の上方に聖像が掲げてあつて、授業を始める際にはいつも先づ之を禮拜するのだといふことで、このやうな處にカトリックの嚴肅な宗教的儀禮を偲ぶことができる。併しこゝでも今では傷病兵慰問のための勤務奉仕が行はれてゐて、生徒たちがちやうどその作業をしてゐるのをも參觀し、それから寄宿舎のなかを見廻つてそこを辭したのであつた。このほか

には同じくロシア人を教育するための北滿學院を訪うて、その院長から從來の經驗に基づいて考へられたロシア人教育に關するいろいろな意見を聞いたのであつたが、これなども滿洲國としてはよほど深く考慮しなくてはならない問題の一つであることを感じさせられた。

ハルビンの町のもう一つの特徴は、それがかなりに廣い河幅を展べてゐる松花江の流れに沿うてゐることである。ごく古くはこの邊りは蒙古人の一部落であつたらしく、哈爾濱といふのも蒙古語で、平坦な草原が哈喇といふ織物のやうに見えることから起つた名稱であると傳へられてゐるが、そこへロシア人が都市をつくつてこのやうに發展したのだと云ふことである。松花江に沿うてゐる處から、支那名を濱江と云ひ、今では瀋江省の首都になつてゐる。併しともかくハルビンがこの松花江に沿うてゐることは、都市としての發展に幸ひしてゐると同時に、これに風趣を添へてゐることも多大である。この邊りでは夏の暑さと云つてもさほどではないが、それでも七、八月頃になると、人々は江岸に出かけて涼をとり、また舟遊びなどをさかに行ふ。對岸には太陽島といふ細長い島が横たはり、

その鳥影が水浴場になつてゐてロシア人の男女がたくさんにそこで泳いでゐる。かういふ有様を眺めると、やはりそこに彼等が生活を楽しんでゐる姿が十分に覗はれるのであつた。避暑のための簡素な家屋もその邊りにたくさんに見られた。満人の漕ぐボートに乗つて、青い空と雨水でやゝ濁つてゐる河の流れとをじつと眺めてゐると、どこか環境のちがつた一種の情緒が私の眼前に展開するのであつた。

江岸に沿うてはまつすぐな散歩道がつくられてゐて、その一端にはヨットクラブといふのがあり、夏の夜はそこで音楽を奏し、ロシア料理を味ふこともできる。かういふ場處では會衆全體が一團のやうな氣もちになつて、お互ひに楽しみを分たうとするのが禮儀といふものであらうと思はれるのに、そこに或る日本人の一群があつて、演奏されてゐる音楽などには一向かまはず、各人が交互に何やらしゃべり出して拍手をするやら、聲を張りあげて歌をうたひ出すやら、いかにも傍若無人の體であつたのには、私は少なからず苦々しい感に堪へなかつた。しかもそれらはすべていはゆる教養のある人たちにちがひなかつたので、このやうな處にもやはり例の島國根性があらはれてゐるのではないかと思つても

見たのであつた。

國都新 京

新京は地域的にはほど満洲國の中央に位置してゐるのだからその點では首都たるにふさはしいわけであるが、この附近は大體平坦で、また大きな河川もないので、それだけに自然の風趣には乏しい。併しさすがに大規模な都市計畫が實現されてゐて、道路はなかく立派に出来てゐる。中央を南北に貫いてゐる大同大街や、そのまん中にある大同廣場など、他には見られない壯觀を呈してゐる。この大街に沿うて建築を豫定されてゐる建物のうちで、近頃の資材不足で手をつけずにあるものもかなりにあつて、そこは空地で残されてゐるが、外觀は却つてこの儘の方がゆつたりした餘裕があつてよいやうな氣もする。樹木も相當に植ゑられてゐるのは氣もちがよい。

ところでこの資材不足がさういふ大建築を遅らせてゐるのはまだしもよいとしたところで、その影響が併し住宅にまでも及んで、そこに著しい住宅難を現じてゐるのは、まこと

に困つたものやうである。新京の人口は今はずんずん増加してゐるのであるし、日本内地から轉住する人だけでも決して尠なくはない。ところがそれらの人々を收容する住宅がないと云ふのでは、どうにも動きがとれないことになる。現に新京では、六疊や八疊の部屋に二人や三人が同居してゐるといふのが普通であるし、或る人などは短い期間ではあるが七人も同居したことがあつたなども話してゐた。だから家族のある人などでそれを呼び寄せることができずに居るのも随分あると云ふし、また自分たちにしても部屋に歸つても勉強などはとてもできないので、つひよそで暇をつぶす時間が多くなることになり、これらがその人たちの生活を落ちつかせないやうにしてゐる影響はかなり甚だしいやうである。つまりその結果は到るところで仕事の能率をわるくしたり、更にわるいことには徒らに歡樂街を繁昌せしめることにもなるので、この問題は決して過小視してはならない事柄であると思はれる。しかも一方ではそれにつけ込んで歡樂街の商人たちが徒らに、暴利を貪つてゐるのも苦々しい限りであつて、それには時に警察が干渉を行はないわけでもないやうであるが、やはり裏には裏があるらしくも見える。

新京でのもう一つの問題は交通機關の不足である。ここでは電車がなくて、乗合バスだけを交通機關としてゐるので、朝夕の通勤者往復の時間には一通りならぬ混雑を呈するの誰も弱り抜いてゐるやうであり、おまけに遠隔の區域に住んでゐる人たちは最後のバスに乗りそこなふと歸宅出来なくなつてしまふので、その際の混雑は一層ひどいとも聞いてゐる。バス以外には満人の洋車や馬車があつて、それらも多少の補ひにはなつてゐるが、ともかく全體として交通機關の甚だしく不足してゐるのは事實である。これも都市計畫と共に豫定されてゐた地下鐵道が當分は出来なくなつてしまつたのに依るのであらうが、何れにしても現在ではひどく不便を感じさせられてゐる。

滿洲では物價が高いと聞いてゐたが、なるほど、實際にあたつてみてその高いのに驚くことがある。大體から云へば内地に比べて二倍乃至は三倍といふ程度であるから、少しぐらゐ給料が多くても結局は同じことであるし、うっかりすれば却つて不足するに違ひない。近頃ではこゝも同じ圓ブロックの範圍内に屬してゐながら、なぜこのやうに貨幣價値がちがふのかといふことは、ちよつと我々にはわかりかねるが、併しそのおかげで日常品

などは内地で影を潜めたもので、こちらにはまだかなりあるらしい。九月になると、もうそろ／＼寒くなるので、百貨店に毛の下着などが並べてあつたが、そのなかに上下揃ひで百六十何圓といふ定價がついてゐたのは、さすがに呆氣にとられてしまった。私はそこで石鹼を買はうとして店員に値段を尋ねると、三箇入りで一箱一圓だと答へたのはよいとして、だが三箇は要らないから一箇欲しいと云ふと、一箇ならば五十錢だといふ。先づ内地ならば、せいぜい十五錢の品物である。併しどうも斯うなると、普通の數學はまるで通用しないといふことになるのであるが、これもやはり商賣の一つの秘訣かもしれない。

どこに行つてもさうのやうであるが、概して日本の商人たちはとかく日本人を顧客にすることしか考へてゐないらしい。そしてその間で儲けられるだけ儲けようとしてゐる。これがいつの間にか物價をせり上げてしまふことにもなるのであるらしいが、全體の人口から云つて満洲には満人の方が遙かに多いのであるから、どうもこのやうな商賣のやり方は合理的とは云はれないので、こんな處にもやはり島國根性が極めて濃厚であると思はれないのであつた。

新京が以前に長春と呼ばれてゐた時代からある満人街は、今では東北に當る一部をなしてゐるに過ぎない。併しその邊りをのぞいて見ると、風俗がまるで異つてゐるだけに、我々には少なからぬ興味がある。その中心地には満人の百貨店がずらりと並んでゐて、そこらはいつとも大いに賑はつてゐる。こんな處で店々の看板や、そこに記された文字を見るだけでもなかなかおもしろい。日本内地と同じやうに、こゝでも毎月一日は奉公日となつてゐるのだが、或る店の正面に「奉公今日忌酒」と貼り出してあるのを、私はふと眼にとめた。これはなかなか味のある文字で、支那や満洲の人たちはやはり文字の使ひ方のうまいのに、私は感心しないではゐられなかつた。支那風な影繪芝居などについても、いろいろ話は聞いたが、これはこゝでは或る期間しか演戲を行はないので、それを見る時機を失してしまつたのは残念であつた。

吉林の風光

八月十七日の朝、新京を出發して、吉林に向ひ、それから東邊道の旅に赴いた。この旅

行には三木清氏も同道せられ、それに案内役としてN事務官も加はつてくれたので、大いに氣強かつた。

この前の北滿の旅は、大體に於て廣漠な平野のみを眺めて來たのであつたが、今度は東南地方の山嶽に取り圍まれた處を主としたので、車窓からの眺めもよほど趣きを異にしてゐた。新京から一時間ばかりも東へ走ると、そろそろ遠方に山脈の連なつてゐるのが見える。この邊りの山はまださほど高くもなさうであるが、それでも北滿の平野とはもうよほど風趣を異にしてゐる。そして吉林へ近づくと、山地がだんだんに多くなつて來る。

吉林に着いたのは晝近くであつたが、旅館に荷物を託したまゝ省公署にゆく。驛からまづすぐの道路がやがて松花江に突きあたり、そこから江岸に沿うて立派な道路が出來てゐる。省公署はこの江岸に臨んだよい場處にある。そこで省次長に會つて、吉林省に關するいろいろな話を聞いたのであつたが、これはなかなかおもしろかつた。大體の要點は、この省には山地が多いだけに木材の産額がかなりの量にのぼるし、それを松花江の流れを

利用して運び出すことのできるのが便利であるといふこと、農産物や鑛物資源も豊富で、それだけに全滿のなかでは最も富裕な省であるといふことなどであつたが、それらをかぎり詳しく説明されたのであつた。吉林は滿洲での古都であるだけに、富裕な豪族がたくさん住んでゐて、街路を歩いてゐる子女の風貌をちよつと見ても、すぐにそれがわかると云ふやうな話も聞かされた。おまけにこの土地の風光はなかなかにすぐれてゐて、幅廣い松花江を隔てて彼方の山を望む景色などは、我が國での京都の眺めを一層雄大にした趣きをもつてゐるので、それだけに住み心地もよいことと思はれる。

省公署を辭してから旅館で少憩の後に、公會堂での講演會に赴いた。それをすませて、さてこの地の風光に接しようといふので、北山べいざんにのぼつた。北山といふのは、町の北側に立つてゐる小高い丘陵であるが、こゝから眺めた景色はなるほどすばらしかつた。松花江にとり圍まれた町の全體が繪のやうに見おろされるのが、いかにもみごとである。丘の上には、いろいろな古刹が立ち並んでゐた。中央の藥王廟といふのが所謂娘々廟にやんにやんやまで、その正面には天下第一江山と記した大きな横額が懸つてゐる。この娘々廟といふのは、神仙

の西王母を祭つたとも言ひ、または雲宵、避宵、瓊宵といふ三姉妹が悲戀により昇天したのを祭つたものとも言ひ傳へられてゐるのである。娘々は人妻又は母の意味で、この廟に詣ると長壽を保ち、眼病を治し、子女が授けられるといふので、参詣者を集めてゐるのださうである。最も著名なのは、大石橋の南の迷鎮山にある廟であるが、そのほか支那や滿洲の各地で、この廟を見ない處はないほどであり、舊四月には盛んな廟祭が行はれるといふことである。しかしちやうどこの日も舊七月中に相當するといふので、その祭事が行はれてゐたし、それに集まつてくる民衆で全山が非常に賑はつてゐた。堂宇の立ち並んでゐる間を通り抜けて山を降つて來ると、その降り口には美しい少女が支那歌謡をうたつてゐるのなどがあつて、そこにも見物人を寄せ集めてゐた。すべてこんな風俗の中にも、我々にとつてはどこか異國情緒があつて、さすがに文化の相異を偲ばせるのもあつた。

北山を降りて、それから省次長の催された歓迎の宴に赴いたが、そこも松花江に面した眺めのよい場處であつた。それにこの日は川祭りがあつて、對岸で花火を打ち揚げたり、飾り船を浮べたり、ボート・レースなどもあつたりして、その見物人でひどく賑はつてゐる。

た。宴會が終つてから、江岸を歩むと、まるで人に埋められてしまふほどの混雑である。この川祭りは我が國の川開きに倣つて近年始められたものであるといふことであつたが、ともかく今では年中行事の一つになつてゐるらしい。

翌日は市街地を西に少しはづれた場處にある師道高等學校を見に出かけた。これは我が國の高等師範に相當するもので、中等教員を養成してゐるので、その設備も大體は調つてゐるやうであつたが、教育方針などについてはなほよほど考慮の餘地があるやうに見受けられた。さういふ點は、その教授諸氏と多少の座談を試みたらうちに觀取されないわけでもなかつたのであるが、これらの點は、今のうちに改良してゆくことが肝要であると思はれる。

こゝを見終つてから松花江のダムに向つた。これは吉林の上流二十四キロメートルの處に設けられてゐるので、そこ迄大體は河流に沿うて道路が通じて居り、その間の風景もなかなかすぐれてゐる。途中に小白山といふ丘陵が立つてゐるが、この邊りに珍らしく樹木が鬱蒼と茂つてゐて、それだけゆかしさがある。ダムの見物にはかなり多數の人々が出か

けるやうで、吉林との間に乗合バスまでが通つてゐる。

この松花江水電計畫については、こゝに細々と記すまでもない事があると思ふが、ともかくその第一期計畫では十八萬キロワットの電力を目標としてゐることと、それと同時にこの下流地方でこれ迄いつも雨期には洪水の害に悩んでゐたのを、このダム設置によつて全く防ぐことができる點に非常な利益があると云ふのである。つまりこれ以下流地方に多大の水田を開拓することも豫定せられてゐるし、下流の水量がダムによつて平均してくるので汽船の航行が少なからず安全になることも見られてゐるし、そのほかに貯水池の完成によつてこの地の風光がすばらしく佳くなることも考へられてゐる。たゞこの第一期計畫は昭和十六年には完成する筈であつたのが、近時の資材不足の影響をうけて、なほ數年は遅延するといふことで、併しこれは現下の事情としていかにも止むを得ないのであらう。何しろダムの高さが八〇メートル、長さが一一〇〇メートルに及ぶと云ふのであるから、それだけにつかふコンクリートにしても驚くべき量であるにちがひないからである。

それからもう一つには水没地の住民を他に移住せしめなくてはならないのであるが、大體は山地に屬するとは云へ、それでも貯水池の面積が五百平方キロメートル以上もあるので、住民の戸數もかなりに上るといふことである。これは水電事務所に詳しく表示してあつたが、それだけでも一仕事にはちがひない。さて、我々はこの事務所から案内してもらつて、ダムの現場でいろいろの説明を聞き、それからゆつくりと晝食の御馳走にまで預つて、そこを辞したのであつたが、こゝの案内係もなかなか忙しさうで、これもむしろ一苦勞であらうと思はれた。

高勾麗の古墳

吉林を出發して通化に向つたのは、その日の夜十一時であつた。同じ滿鐵の汽車でも、幹線から外れてこのやうな支線へ來ると、いろいろの不便がある。列車の速さも遅くはなるし、それに寢臺車だけはあつても、食堂が附いてゐないので、大きな驛で辨當を買ひそこなふと食事もできないといふ始末である。おまけにこの線ではこの辨當を賣つてゐる驛

が梅花口の一箇所しかないといふことであつたし、それも朝暗いうちにそこを通るといふので、これは併しボーイに頼んで買つてもらふことにして、漸く安心した。

この線に沿うては、兩側にかかりの山が列なつてゐて、山嶽地方に踏み入つた感じがだんだん増して来る。通化に着いたのは翌日の午前十一時頃であつたが、こゝまで来るのに既にかなり長い旅をしたやうな気持ちであつた。

通化の驛から市街地までは七、八キロメートルも隔たつてゐる。この間は都市計畫の豫定地になつてゐるのださうであるが、今は全く空地であり、ともかく汽車の乗降客には甚だしい不便である。併しこの傍には渾江の広い流れが丘陵の麓に沿うて通じて居り、それがやがて市街地をめぐつて居るので、風景はなかなかよい。市街地に接して江岸に立つてゐる玉皇山といふのが今は公園になつてゐるが、こゝに上ると、その眺めはまた一入である。山上には娘々廟や關帝廟があり、また日露戦役烈士の忠魂碑が立てられ、戦役當時の塹壕の跡まで残つてゐて、そゞろに往時を偲ばしめる。

通化には二日間滞在して、いろいろの學校を見まはつたが、これにはそれぞれの興味を

感ずることができた。しかしそれよりも感銘の深かつたのは、警務部の人から聞いた匪賊討伐のさまざまな話であつたかも知れない。元來が東邊道は匪賊の巢窟であつたので、數年前には數萬を數へたのであつたが、今ではそれも極めて少數になつてしまつたさうで、だからその間の討伐の苦心もなかなか言語に盡せないものがあつたのであらう。最近にはこの年の二月に楊靖宇といふ匪賊の頭目を討ちとめたので、これで先づこの邊りにはその跡を絶つたと云つてよいとのことであつた。尤も高粱の繁茂する時期を過ぎてみないと本當のことはわからないが、大體はもはやそれほどの心配もあるまいとも話されてゐた。何れにしてもこれ迄は匪賊の害がかなりに烈しかつたので、省内各地では強制的に集團部落をつくらせたのであるが、その結果として農家の遠方への耕作が不可能になり、耕作面積がよほど減じたとも云ふことである。

さて、それから二十一日の正午少し前に通化を出發してその南にあたる輯安に向つた。この中間には有名な老嶺の大山脈が横たはつてゐるので、多くの山峰が屹立し、溪谷も深まつてゐてその景觀にはよほど我が國内地のそれに似た趣きがある。ところでこの鐵道線

路はほんの數箇月前に開通したばかりなので、まだ危なげな場處も諸處に見受けられたが、それだけに速さも一層遅く、輯安に着いたのはもう夕方近い頃であつた。

この輯安といふのは、古くは通溝と稱し、今から約二千年以前から七百年ほどの間、滿洲南部及び北朝鮮を統治した高句麗の首都として有名な場處である。尤もその統治の後半には都を平壤に移したとのであるが、それ以前にこの地を都にしたと云ふのも、北に峻しい老嶺山脈を負ひ、南は鴨綠江の流れに臨んだ要害の地域であつた故であらう。ところで之が二千年も古い時代でありながら、その頃丸都城と稱してゐた都城は、なかなか大規模のものであつたらしく、現在でも輯安附近の畑地を掘ると、殆ど到る處からその當時の古瓦が出て來るといふのを見ても、それが推測されるのである。輯安の町外れに農業學校があつて、翌日は先づそこを見に行つたが、この學校の構内の畑地から掘り出された古瓦のなかには、昔の儘のみごとなものも澤山に見られるのであつた。大體にその表面の模様には數種の異なつたのがあつて、裏面はどれも布目模様になつてゐる。かういふ瓦の破片はそこらに雜然と積み重ねられてある程に多く、そこでそのうちのよささうなものを選

んで私たちも記念に持つて歸つた。

輯安の市街地は古い城壁にとり圍まれてゐるが、その外側の方に廣い道路をつくらうと云ふので、さき頃そのあたりの人家を立ち退かせて、今は道路工事を行つてゐる。ところが、その諸處に花崗岩の圓い大きな礎石の据ゑられてゐるのが、そのおかげでたくさんに見つけ出された。之は直徑が一メートル程もある立派な石で、確かに昔の殿堂の礎石であつたにちがひないのである。それと同じものは、以前にも近くの畑地から幾つも掘り出されてゐるさうであるが、滿人はそれを擔いで行つて、なかをくり抜いて石臼にするといふ話も聞かされた。なるほど實利主義の彼等のやりさうなことであるが、これは何とかして保存の方法を講じたいものである。今度の道路にする場處などでは之をそのまま据ゑて置くわけにもゆくまいから、せめて礎石のある位置を測定して、どこか適當な場處にその通りの配置で移すことにでもすれば、それで往時の殿堂の規模を推知することもできて、甚だ適切であらうと思はれる。この事を私は縣の當事者にも提言しておいたのであつたが、このやうな古い記念物は、一度その位置をはづしてしまへばもうそれきりになつてしまふ

のであるから、ぜひとも慎重な處置を望まないわけにはゆかないのである。

ところで、さらにそれ以上にいかにもすばらしい記念物としてこの地に残されてゐるのは、附近一帯にたくさん散在してゐる古墳である。それらの古墳のうちで現に調査されてゐるのは、まだ幾らもないのであるが、その二、三を見ただけでも、既にこれらの古墳がどれほど珍重すべきであるかを知ることができる。

古墳の外形は、いづれもかなりの高さに圓く土を盛つたやうになつてゐるが、内部にはどれにもすばらしく大きな花崗岩を積み重ねた四角形の石室があつて、その四壁や天井にさまざまの壁畫が描いてある。しかもどんな繪具をつかつたのか判らないが、赤、青、黄などの色がいかにも鮮やかに出て居り、それぞれの繪も實に奇抜でおもしろい。戦争の繪もあれば、天女の舞つたのもあり、龍やその他の動物や花卉などを描いたのもあれば、四壁にそれぞれの四神が天井の石を持ち上げてゐる姿を現はしたものなどもある。床には石棺を据ゑるための大きな土臺石があり、傍に小さな石の並んで置かれてゐるものもあつた。若しこの暗い古墳のなかにたゞ一人でじつと佇立でもしてゐるとしたなら、そこには實にふ

しぎな気持ちで千數百年前の古い時代を追憶することができてもあらう。私はひたすらそんな感に浸りながら、そとろにこれらの壁面を見つめないわけにはゆかなかつた。

ところで、これだけの珍重すべき古墳を、出来る限りそのままに保存する方法も、今ではもつと周到に考慮されなくてはならないのを同時に痛感したのであつた。それと云ふのも、これ迄は全く土中に埋もれてゐたので、それが却つて壁畫面などを昔の形に保たせることに役立つたのかも知れないと思はれるからである。ところが之を掘り起して外氣と通じさせることになると、それだけにいろいろな外部的の變化が之に影響して来る。現に或る古墳などでは、水が一面に床土に溜つてゐて、ひどい濕りをもつてゐたが、冬になればそれが當然に凍結するのであるから、これが畫面にどう影響するかといふことなどをよく調べておかなくてはいけない。また繪具の赤い色などは手をちよつと觸れると、指が赤く染まるといふほどに鮮やかなのである。そこで見物人には之に手を觸れることなどを嚴禁する必要もあるに違ひない。三年程以前に最初に掘り出された古墳では、壁面の繪が實にみじめに剝ぎとられてゐる。これを僅かに剝ぎとつたところで、繪を傷つけるだけで何に

もならぬことぐらゐは誰にも明らかでありながら、それでも敢てさういふことをする人たちが居るのだから、いかにも慨嘆に堪へない次第ではあるまいか。何れにしても之等の古墳に對しては十分に保存の方法が講ぜらるべきであり、また實際にそれだけの價值のある貴重な記念物にちがひないと思はれるのである。そしてまだ掘り起してないものは、保存の方法を研究してから後に掘り起すやうにでもすることが望ましいのではあるまいか。

この日の古墳めぐりは、我々の便乗したトラックの故障で、豫定通りにゆかなかつたのは遺憾であつたが、それでもともかくこれで大體を知ることのできたのは幸ひであつた。記念に持ち歸つた瓦の數片をとり出して見ると、あの幾つも立ち並んだ古墳のありさまが私の眼前に髣髴するのである。

鴨 緑 江

輯安の附近になると、鴨緑江の河幅ももうさほど廣くはないが、流れはかなりに速いやうに見える。上流からすつと山の間をうねつて來てゐるのであるが、この邊りの北岸は

やゝ平地になつてゐるので、そこには水田も耕作されて居り、滿洲ではこの土地の米がいちばん良いとのこと、なるほどこの旅館で食膳にのぼせた米の美味であつた理由も肯づかれたのであつた。鴨緑江の下流のダム工事が進捗すると、この輯安縣のなかにもかなりの水没地が出來るといふので、こゝにも民家移住の厄介な問題のあることを 縣公署で聞いた。

さて我々はこの輯安から鴨緑江を溯つて臨江までゆくことになつてゐるので、ちやうどこの間にはプロペラ船が通つてゐるから、それに乘つてゆけば兩岸の風景も眺められてよからうと云ふことであつた。それで大體さう定めておいたのであるが、輯安の旅館で尋ねると、近頃はプロペラ船は出ないから、對岸を通つてゐるバスでゆくより外はあるまいとの話である。これはちよつと意外でもあつたけれど、それが事實であれば仕方もない次第で、ともかく何れにしても對岸の滿浦鎮にわたることにした。

輯安から滿浦鎮までは汽車も通じてはゐるが、時間の都合がわるいので、トラックで渡船場までゆき、そこから船で渡る。これでも國境であるから對岸には税關があつたりし

て、なか／＼面倒である。ところで満浦鎮の旅館で訊くと、プロペラ船は通はないわけではないが、明日は下りの日だから上りは明後日になるし、おまけに上りとなると音が喧ましく大變であるから、やはりバスの方がよからうと云ふのであつた。どうも話の辻褃が合はないので妙に感じられたが、何れにしてもバス會社と連絡をとつてゐるらしいのである。それと云ふのも實は先月の末頃にこのバスが鴨綠江のなかに轉落したといふ事件があつたので、その際には下に繋いであつた筏でとめられて幾らかの怪我人が出ただけで済んだものの、その影響がないわけではあるまいから、そこで宣傳に務めてゐることも解せられるのであつた。併しともかく一日を無駄に過ごすのもつまらないので、次の日にバスで出發することに決した。

朝鮮側に来て驚くのは、物價の安いことである。輯安と満浦鎮とでは河の兩岸に向ひ合つてゐながら、旅館の宿泊料にしても後者は前者のおよそ半額にしかあたらない。それで同じ圓ブロックに屬してゐると云ふのだからちよつと我々にはその理窟がわからないのである。たゞ満浦鎮では米が不足してゐて、麥と粟との混じたやうなものを食べさせられた

のには閉口した。

この夜から雨が降り出して翌日に續いた。尤もそれは降つたり止んだりと云ふ程度の雨ではあつたが、ともかくその中を朝早くバスで出かける。バスの前方の運轉手臺の横に一人の老爺が腰かけてゐたが、バスが十分間ばかりも走つた邊りで何やら朝鮮語で運轉手に話しかけると、運轉手はバスを停めた。すると老爺がバスから降りて、その向うに待つてゐた老婆を呼んで自分の代りに乗せたのであつた。これは眺めてゐていかにも暖かみのあるほゞゑましい風景であつた。

バスは三傑嶺といふ高い峰を超えて外貴といふちよつとした町に着いたが、タイヤがパンクしたと云ふのでそれを修理するのに一時間餘りもかゝつてしまつた。それで外貴を出發したのはもう晝近くであつた。ところがバスが出發しようとする、こゝで待ち合はせてゐた連中が大勢乗り込んで來たので、運轉手がこれでは重くてまたパンクするから困ると言ふと、その連中はおとなしく皆降りてゆく。このやうな場合に案外彼等の従順なのは驚かされたが、それも生活がのんびりしてゐて、次のバスを待つまでの閑つぶしぐらゐ

は何も氣にするには及ばないと云ふ心がまへにもよるのかも知れない。

やがて東西といふ處を過ぎると、急な登り坂になつてうねりまがる坂道をバスは一氣に登つてゆく。いかにも危なげな場處もいくつかあつたが、道路が比較的によいのでまだしもよかつた。この嶺の頂上には、麻田嶺、標高七一四メートルと云ふ柱札が立つてゐた。うつすらとした雨雲が下の方に見えるほどの高さである。ところが、この邊りの山々の頂上近くまでどこも畑になつてゐて作物が植ゑられてゐるのであるから、これにも聊か驚かされるのであつた。平らな耕作地が少ない故でもあらうが、かうなるとまるで樹木のない山が洪水を惹き起すのも當然のこととなる。朝鮮には今では緑地化運動の効果がかなり擧げられてはゐるものの、まだそのゆきわたらぬ場處もそこ此處にあるやうに思はれる。

山を降つた處でバスを乗り換へる。今までの車體は正式の検査を経てゐないものであるから、この先方にある駐在所のやかましい巡查の目にとまると大變だといふのであつた。さう云へば、天井が焼けこげて間に合はせの板を張つてあつたり、窓硝子の破れた處などもあつた。これが鴨綠江に轉落した車であつたのかも知れない。ともかく別の車に乗り換

へてそこを出發する。暫くゆくと標高七一〇メートルの自作嶺といふ高い峠があつて、それを越えた處に慈城といふ町があつた。そこへ着いたのが午後の三時近くで、大急ぎで晝食をすませた上、またバスに乗る。

こゝから少しゆくと、それからはずつと鴨綠江岸に沿うた路になるのであつたが、なるほど斷崖の切り立つた危なげな個處がいくつも續いてゐる。こゝらで車をすべらせたなら大變であるが、運轉手はさすがに巧みに操つてゆく。兩岸に山々が連なつてゐて、眺めはなかなかによい。臨江の對岸に當る中江鎮に着いたのは、もう夕方七時であつたが、これで先づ安心したわけでもあつた。そして朝からバスに揺られて來た一日の旅の疲れを休めるのには、この土地の旅館はいかにも落ちついてゐて恰好な場處であつた。

地下資源

翌二十四日の朝、中江鎮を出て對岸の臨江に渡る。この間には橋梁が架けられる筈になつてゐるのであるが、コンクリートの橋脚だけが出來てゐて、資材關係から今ではその儘

工事が中絶してゐる。このやうなものは何とかして完成させなければ、一層無駄を重ねてゐることになるわけである。この橋の少し上流が渡船場になつてゐるのであるが、渡船賃が普通は十錢であるのにこの日は十五錢になつてゐるので、同行した人にその理由を尋ねると、河に水が増したときには渡船賃が高くなるので、時には五十錢にもなることがあると云ふ。水の量で渡船賃がちがふと云ふのは、これは大いに合理的で甚だおもしろいと感じた。

そこから臨江の町へゆく迄の間は道路の泥濘が實に甚だしく、便乗したトラックを通すのに一通りの苦勞ではない。朝鮮側の道路がどこも立派であつたのに、ほんの河一つ隔てた對岸でありながら、これほど違ふものかと驚かされる。もちろん土質の相違もあるには違ひないが、それにしてももう少し道路をよくしなければ、それこそ常時の無駄はすぶん大きいわけである。

縣公署で少憩の後に、鴨綠江に沿うてやゝ下流にある大栗子溝に向ふ。この間にも山の中腹に道路が通じてはゐるが、トラックではかなりひどく揺られた。併し高いところか

ら鴨綠江を見おろした風景は實にみごとであつた。流れを下つてゆく筏は、どれも先端を尖らした細長い三角型をなしてゐて、それだけに速さが非常にはやい。これは鴨綠江の筏の特質なのであるが、それも頗る合理的につくられてゐるわけで、自然に經驗をつんでさうなつたのであらう。そこに我々人間の經驗の價値があるのである。

大栗子溝といふのは、江岸から僅かに離れた場處にあつて、有名な鐵鑛山があり、今では東邊道開發會社の最も主要な資源地となつてゐる。この邊りの老嶺山脈一帯に互つては諸處に鐵や石炭を産出するので、従來は交通の不便と匪賊の出沒とによつてそれらの調査さへ甚だ不十分であつたのであるが、現在では或る程度までそれらが明らかにせられ、鐵鑛としては大栗子溝の外に、七道溝にも採鑛所が設けられ、石炭は五道江、鐵廠子、煙筒溝、八道江などで盛んに掘り出されてゐる。その外に眼ぼしい場處も數箇所あるので、ともかくこの附近に於ける地下資源はすばらしいものであるには違ひない。それにしても現時はやはり資材動力の不十分な點で、開發が想ひ通りに運ばないやうに見えるのは遺憾に思はれる。

鳴緑江岸から折れて鐵山の入り口にかゝると、さすがにすばらしい光景がそこに展開する。遙か彼方の山の中腹に採鑛所の建物が幾段にも並んでゐて、その上の方に露天掘りの鑛脈が望まれるのであつた。そこから坂道を上つて事務所へ着き、一通りの説明を聴いてから露天掘りを見にゆく。こゝの鑛脈は赤鐵鑛を主としてゐるので、六十パーセント以上の鐵を含んでゐる點で稀に見る富鑛であるとのことである。そして實際に眼の前にその赤く色づいた大きな鑛脈が露出してゐるのであるから、それはまたみごとな有様であつた。この外に坑内掘りもあつて、それらから掘り出された鐵鑛が頻りに運ばれてはゐたが、全體の産額がどれ程に上るかは局外者には祕密にされてゐるのであつた。

ところでこゝで一場の哀話を聞かされた。それは露天掘りで鑛脈を爆破する際の危険な仕事を敢てした技師の一人が數日前にその破片を浴びて殉職したので、今日は恰もその葬送の式が行はれると云ふのであつた。さう云へば、この葬儀に列する遺族の人たちが、昨日満浦鎮から我々と同じバスに乗り込んでゐたので、よそながらにその話を耳にしてゐただけに、一層感慨が深かつた。そしてこの翌日通化への汽車に乗り込むと、再びその遺族が

遺骨を前にして坐つてゐるのに出遇つたのであるから、それは當然のことにはちがひないのであつたが、妙に印象を強くしたのもあつた。鑛山では恐らくこのやうなことも屢々起るのであらうが、それも貴い犠牲の一つであることは確かである。

夕方臨江に歸着して今後の旅程を相談する。實はこゝから撫松に向ふ豫定でもあつたのだが、私だけは歸りを急ぐ都合もあつたので、若しさうなるなら別に分れて歸るつもりであつた。ところが連日の雨で撫松への途中の橋が落ちてゐることなどがわかつたので、結局こゝから一緒に歸ることに決した。それで翌日の朝歸途に就いたが、臨江から通化までの間の汽車は先月漸く開通したばかりで、なほ假營業といふ有様であり、屢々脱線などもあるといふので、なかなか氣が揉める。老嶺の山々を貫くトンネルが幾つかあるが、そのなかで立往生をしてみたりするので心細くもなる。それでも無事に通化に着したが、どれ程もない距離を朝から夕方まで費してしまふのであつた。それにしてもこの汽車の通じなかつた先頃までは臨江への往來がどんなに難儀であつたかが想像される。

荒廢せる熱河地方

二箇月の旅程を豫定して、私は滿洲に來たのであつたが、まださほど落ちつきもしないうちにその二箇月が過ぎてしまひさうになつた。どうも月日の經つのは早いものである。そして九月に入らうとする頃には、新京ではもう夜分などかなり寒くなつて、うつかりして風邪をひいてしまふ有様でもあつた。それにしてももうそろそろ歸り仕度にとりかゝらなくてはならなかつたので、その歸りがけにせめて承德の古蹟を見ておきたいと思つて、九月の始めに新京を出發して熱河に向ふことにした。またもう一つには、私たちの新短歌の仲間で親しい人々が奉天に住んでゐられるので、そこで新短歌人の會合を行ひたいとのことでもあつたから、その豫定の日取りに間に合ふやうにしてこの旅に出かけたのであつた。この旅行にもN事務官が同道されたのは私にはあり難いことであつた。

途中奉天に立ち寄つて數時間を過ごし、そこを出發したのは、もう夜十一時であつた。それで直ぐに寢臺にもぐり込んでしまつたが、翌朝目ざめると、窓外の景色はもう何となく異つて見える。汽車がだんだんと進行して、熱河省に入ると、その異色が一層甚だしくなつて來る。異色といふのは、つまりこの地方一帯がいかに荒廢してゐることを示すものに外ならないのである。諸處に畑地があつて、作物が植ゑられてはゐるが、一見してそれの貧弱なのがわかる程でもある。それと云ふのもこの邊りの土質はどこを見ても赤い色をして居り、時にはそれが白つぽくさへなつてゐる。恐らくこの土地の子どもたちに、土の色が黒いなどと云へば、それは誤まりだと抗議されるのに違ひあるまい。おまけにもつとひどいことには、その邊りにある山々には、どこにも雨水のおかげでひどく掘れこんだ斷層が見られるので、それが遠くの山からこちらへとずつと續いてゐて、その深さが數十メートルにも及ぶものさへ決して珍らしくはない。幅もかなりな廣さに及んでゐて、そのなかの土はすべて流されてしまつてゐるのである。こんな有様を見ると、いかにも慘めな土地であることがしみじみと感ぜられる。言ふまでもなく、それはこの地方の山々にまるで樹木の見られないことに依るのである。

これは後に承德で聞いた話であるが、この地方にしても數十年前までは山々に多くの樹

木が茂つてゐたのを住民たちがすべて伐採してしまつたのだと云ふのである。それも一つにはその頃多く跋扈してゐた匪賊の難を免れようとするためでもあつたが、もう一つには彼等の無知からして何の考慮もなく一樹も残さず伐つてしまつたのだとも云はれてゐる。そしてその結果として雨水で表面の沃土をすべて流し去つてしまひ、そこでこれほど惨めな有様に變つてしまつたのもあつた。それでもまだ土地の廣いのをよいことにして、農作物をつくるにしても、毎年場處を變へて耕してはゐたが、近頃ではどこも荒地になつてしまつてその收穫は驚くべく少ないとも云ふことであつた。だからこの地方は年々疲弊してゆくばかりで、食糧難に悩んでゐる。承德で視學官をやつてゐる滿人の話によれば、折は交通の不便な土地の學校を見まはりに歩いてゐるが、或る場處などでは食糧がなく、何かの木の葉を食したことさへあるとのことであつた。これはもちろん極端な場合でもあらうが、そんな話を聞くにつけても、この地方の文化の程度の低いことを想はないわけにはゆかない。尤も以前にはこの地方は阿片の産地として知られてゐたのであつたが、近ごろではその栽培も多くは禁止されてゐるので、阿片の收穫も殆ど不可能になつてゐる

わけである。ともかくこのやうにして熱河地方の住民が今は非常な困難に陥つてゐるのは確かはやうである。

私の乗り合はした汽車のなかには、京阪地方の一流のホテル經營者たちの一行が乗つてゐて、その人たちは滿洲を一巡して來てこれから北支へ向ふところだと云ふので、滿洲の諸地で見聞して來たいいろいろの事がらを話してくれた。これはやゝ退屈な汽車の旅の時間つぶしには甚だおもしろかつた。奉天を前夜に出て、承德に着くのは翌日の夕方になるのであるから、こんな事でもなかつたらいかにも飽き飽きしたかも知れない。承德の驛での一行には別れたが、宿で再會するかも知れないとは話し合つたものの、それきり出遇はなかつたのは今さら名ごり惜しいやうな氣もした。

避暑山莊

承德で誰も知らないものの無いのは、清の康熙乾隆兩帝の造營せられた離宮避暑山莊である。これは承德の地が自然の山にとり囲まれた景勝の場處でもあり、そして北京の暑熱

を避けるのに恰好の域でもあつたからであらう。古くは蒙古人の牧場であつたと云はれてゐるが、それが後に康熙帝に獻納せられたのである。尤もこゝに離宮の置かれたのには、避暑のためばかりではなく、北方の蒙古部落を懐柔し、彼等を滿洲族に近づかせて、漢民族に當らしめるためでもあつたと傳へられ、とくに喇嘛廟をそれに附屬させたのは明らかにその意味を示してゐると云はれる。これらの喇嘛廟としては、東山麓に溥仁寺、溥善寺、普樂寺安遠廟があり、東北方に普佑寺、普寧寺があり、更にそれとやらんで北方に須彌福壽廟、普陀宗乘廟、殊像寺、廣安寺羅漢堂が立つてゐる。これらは主として乾隆帝の建立にかゝるのであるが、離宮の規模も乾隆の時代に大いに擴められ、且つ善美を盡すに至つたのであつた。かくて承德の地には住民も多數に集まり、當時に於てこの一帯は極樂壯嚴の靈地としてまで知られてゐたのであつたが、近代に至つて漸次荒廢に歸し、殊に中華民國となつてからは都統をこゝに置いたので、その兵士たちが心なくも之を破壊し、湯玉麟などの頃には最も甚だしかつたさうである。現在は滿洲國でその保存方法が講ぜられようとしてゐるが、まだ僅かに寶物の陳列室が造られただけで、その他には殆ど着手されてゐ

ないやうであるのは、甚だ遺憾の極みである。

實は私は新京出發の前日土肥民生部次長に暇乞ひに參じた際に、同次長もこの地の視察から歸られたばかりの折であつたので、私がこれから承德にゆくと云ふことから自然に古蹟保存の話に觸れたのであつたが、離宮修復の意向は十分に持たれてゐるやうでありながら、それには相當な費用が必要なので、それがうまく支辨できるかどうかを案ぜられてゐるやうでもあつた。併しこのやうな記念物は一度破壊してしまへば、もうそれきりになるのであるから、今のうちに何とか方法を講ずることがいかにも急務であると思はれる。現に私は離宮の一部で、過日屋根瓦がすべり落ちてしまつたのだと云ふ場處などを目撃して、その落ちたまつてゐる瓦の破片を心なく見過ごすに堪へない感さへしたのであつた。またその場處でいろいろな調査をされてゐた伊東忠太博士の御息の話などを聞くにつけても、一層その感を深めたことでもあつた。こゝに敢て滿洲國當事者の英斷を望んでおくのも、後日に悔をのこさせたくない切實な心からである。

避暑山莊をはじめとして、そのほかの古蹟を十分に見まはるのには、もちろん多くの日

數を必要とするのに違ひない。ところが私の日程はほんの一日の見物をしか許さなかつたし、それもその間に二、三の學校の視察をも含めてゐたのだから、まるで駆け足同様である。そこで、ともかく學校の方を早く切り上げて、離宮へと向つた。尤もこの地の國民學校などが古めかしい建物をその儘使用してゐるのを異様に感じたり、またその一部に圖書館があつて、欽定古今圖書集成一萬卷を始めとして、康熙乾隆時代の珍書を並べてあるのをそこで見る事ができたのも、意外の幸ひであつた。この圖書目錄をそこから貰つて持ち歸つたが、今それを開いて見ても何とはなしに興味がある。

避暑山莊についてのこまごましいことは、とてもこゝに記してゐる餘裕はない。上に記した寶物陳列室のなかにこの全體を鳥瞰した古圖が掲げてあつたが、それを見ても實にその規模の雄大なのに驚くばかりである。離宮の外廓は十六支里に及ぶと云ふことであるが、そのなかに自然の丘陵や池水を含んでゐて、隨處に壯麗な建築物や亭橋などを配置してある。乾隆帝は、そこに三十六景の勝觀を自ら選ばれたと云ふことであるが、今はそれらも荒廢して昔の佛を見ることのできないのは、いかにも惜しい極みである。南に向つて三門

があり、正殿は、麗正門に對立してゐるが、その床には大理石を敷きつめ、木材はすべて楠木の白木を用ひたので、當時はこのなかに入るといつも、楠の香氣が充ちてゐたと云ふことである。この殿内の玉座は現在でもその儘になつてゐるので、その外には見るべきものも無いが、どこか往時を偲ばしめるに足りる。正殿の背後にいくつかの殿堂がならんでゐる。文帝が英佛聯合軍の北京侵入を避けて、こゝに蒙塵せられ、病を得て崩ぜられた際の居室なども、今は塵埃に埋まつてゐる。最も奥まつた處にある二層樓は、皇帝の御座所であつたと云はれるが、その前方に石を積んで直接に二階に入ることのできるやうになつてゐるのも妙である。これは雲山勝地と呼ばれ、その北側にはすばらしく大きな一枚硝子をはめ込んだ窓があつて、そこから離宮の庭園を一望のもとに見わたすことができる。まことに絶好の眺めである。庭園には、古くは松林が鬱蒼と茂つてゐたさうであるが、今はそれも残り少なくなつてゐる。そのなかに、乾隆帝が皇后のために建てられた松鶴素と稱する二層樓がある、松林にはもと黒江將軍が乾隆帝に献上した馴鹿の子孫がゐて、これは今では繁殖してかなりな數に上つてゐることである。松林の東には大きな池があつ

て、蓮が一面に植ゑられてゐた。この池の一隅に熱河と記した石柱が立つてゐるが、昔はこゝから温泉が湧いてゐたらしく、最初康熙帝がこの温泉を見つけ出して、ここに離宮の造営をおもひ立つたのであるとも云はれてゐる。そして現に承德もとは熱河と稱してゐたので、雍正帝の時代に承德と呼び換へられたのであつた。今では温泉は湧かないが、それでもこの一隅の水はこの邊りの寒氣の強い冬でも凍らないさうである。こゝに温泉が湧き出てゐたといふのも、考へてみるとちよつと珍らしい事からである。

離宮外にある喇嘛廟のうちでは普寧寺、須彌福壽廟、普陀宗乘廟の三つだけしか見なかつたが、それでも大體の有様は推しはかられたと云つてよいであらう。普寧寺は俗に大佛寺とも稱して、五層の本殿内に高さ七丈二尺の觀音立像を安置してある。木像で金漆を塗つてあるものであるが、これほど大きいのは他に存しないと云はれて居り、ともかくすばらしく偉大なものである。この本殿にのぼる階段には龍を刻した石彫が置かれてあり、またその天井にはいかにもみごとな彫刻が大きな圓を描いて幾重にも飾られてゐる。左右の壁面には五千箇づつの小さな佛像が幾段にも置かれてゐたのだが、いまはその中のただ一

つが残つてゐるだけで、他はすべて持ち去られてしまつたと云ふのであるから、何とも情けない話である。大佛殿の横には、五百羅漢を並べた堂宇などもあつた。この寺廟は西藏の三摩耶廟を模したのであるが、併し全體の感じはよほど違つてゐる。それより純粹に西藏式につくられてゐるのは、須彌福壽廟と、普陀宗乘廟とであつた。これらも今ではかなり荒れ果ててゐるが、それでも全體としていかにも喇嘛廟らしい感を抱くことができ。おもしろいことには、そのなかの幾つかの四角な堂宇には窓だけがあつて、内部はまるで土で埋めてあるものなどがある。これは堂宇として意味がないことになるが、併しそれも恐らく配置の上から必要とされて、そこに建てられてゐるのであらうとも想はれる。寺廟のなかには喇嘛教式の歡喜佛などがあつて、人の眼を惹いてゐる。

この日の夜は、民生廳長に招かれて或る支那料亭に赴いたが、こゝは高臺で、遙かにこの地を取り圍む山々を眺めることができ、まことに絶好の場處でもあつた。室の一隅に大きな掛物があつたので、それを見ると、いろいろな形の刻印が並んでゐる。廳長は満人であつたが、いかにも流暢な日本語でそれを説明してくれた。つまりこの刻印の文句を順次

に續けてゆくと、それが立派に一つの格言的な文章になつてゐるのだと云ふのである。支那人はなかなか味なことを好むものだと、私はそれを聞いて感じ入つたことでもあつた。

四庫全書

とりとめもなく雜然と記して來た私の滿洲雜錄も、もうこの邊りで切り上げることとして、たゞ私が奉天に戻つて來て、あの名だかい四庫全書を見ることのできたことだけを、こゝに附記しておきたい。

承德から奉天への汽車の旅を再び繰り返して、奉天で數日を過ごしたのであつたが、その間に新短歌の上で親しい人々から受けた特別な厚遇については、私は最も深い感銘をとどめてゐる。またその中の一日は新京から來られた寺田編審官に案内されて、撫順炭坑を見まはることができたが、そこにもいろいろな忘れ難い印象もあつた。併しそれらのことは今は省いて、四庫全書のことだけに止めておかう。

四庫全書といふのは、乾隆帝が當時の學者三百餘名を集めて、十年の時日を費して編纂

させたもので、經、史、子、集の四部から成り、支那に於けるあらゆる文獻を網羅した一大集成である。その内容を著録したものが二千四百五十七部、七萬九千八百九十七卷、書目だけを採録したのが六千七百六十部、九萬三千五百五十六卷といふのであるから、まことに驚くべき大量のものである。ところでこの寫本が七通り作製せられて、北京の文淵閣、文源閣、奉天の文溯閣、熱河の文津閣、楊州の文匯閣、鎮江の文滄閣、杭州の文瀾閣に修められたのであつたが、兵亂やその他で散逸してしまつたのが多く、現在では熱河にあつたのが、北京に移されて、北京と奉天とに残存するに過ぎないとのことである。尤も奉天にあつたものも袁世凱の時代に一時北京に移されたが、後再び奉天に持ち歸つたので、奉天城内の文溯閣に隣接して、今は鐵筋コンクリートの書庫が設けられ、そこに大切に保管されてゐるのである。

こゝに所藏されてゐる四庫全書は、全體で三萬六千二百二十一冊あつて、六千四百四十四函に收められてあるので、それがこの書庫の階上、階下に整然と並べられてあつた。ともかくそれがすべて筆寫されたもので、そのなかにはいろいろな精細な挿圖などもある。そ

の勞力だけでもいかにも多大であることが、一見して感ぜられるのであつた。歴史や制度や文藝、美術、宗教などの部門のほか、天文、地理、物産、農工、醫術なども含んでゐるのであるから、眞に百般に亙つたもので、このやうな處にも乾隆帝の偉大な事業を想察することができるであらう。この書の印刷計畫が嘗て民國十七年頃奉天要路の人々によつて起されたけれども、それはやがて中絶してしまつたので、今日では滿洲國でその再現を唱へてゐる人々もあると聞くが、その實現はやはりなかなか困難であるらしい。私はこの書庫のなかでいろいろの説明を聞きながら、ともかく、この貴重書を自ら手にとつて見ることのできたのに、異常な感激を覺えるのであつた。(昭和十五年十月—十六年三月)

高勾麗の遺蹟

輯安に於ける高勾麗の遺蹟のことについては 上記の滿洲雜錄のなかでその大要を述べたので、もはやこゝにそれを繰り返すにも及ばないと思ふが、私はそれらの古墳のなかに立つて、二千年近くも以前の有様を想ひ浮べながら、實に感慨無量であつた。その際の感想をそのままにまとめた詩句をこゝにしるしておかう。

とこ暗みの この古墳のなかにこそ

神秘的な世界は 展げられる。

壁にはゆかしげに 天女が舞つてゐた。

そこに ものしづかな 限りない命がある。
妖しげな魅惑よ。

この古墳のなかで
永遠の日を すごすとしたなら。

ふしぎな怪獣が この壁面に 生きてゐる。
それが わたしの
現実の眼を とらへてしまふ。

そのみごとに 色彩におどろき、
雄渾な構圖に みいられる。
二千年のあひだ 土に埋もれて、
だから文化は なつかしいのである。

黄金の 象眼を施こした 獅子のまなこが
さんぜんと 輝やく、
このくらい古墳のなかで。

貴人の けながい行列、甲冑騎馬の武將など、
ありし昔の おもかげを
この繪卷に 見ることの
めづらしさ。

古めかしい高勾麗の 風俗に興じ、
この壁畫に じつと見入つてゐる。
つちのなかの玄室は
ひどく しめりを帯びてゐた。

みすばらしい 民家の跡から

花崗岩の 大きな礎石が

掘りおこされて、そこにも 瀟洒な官女の

おもかげが うかぶ。

あはれ、民族興亡の跡こそ はかなげである。

人間の歴史は

絶えずふしぎな運命を つゞる。

古墳の 傍らに立つて、

たかくそびえる 老嶺の山々を ながめながら、

そとろに 天地の悠久さを

痛感する。

昔の 満洲

上掲の満洲雑録は、昭和十五年の夏に満洲國民生部に屬する教科書の編審官室からの依頼により同地に赴いた際の見聞記である。従つてこれは、先づ大體に於て近ごろの満洲國のありさまを示してゐることにもなるが、私は古い頃に満洲を旅したことが二度ほどあつた。最初は西洋に留學に赴く折に、ウラジオストックから國際列車でモスクワまで行く途中に満洲北部を通過し、二年後に歸る際にはハルビンから現在の新京、即ちその頃の長春までをロシヤの汽車で旅し、そこから滿鐵に乗り換へて朝鮮を通つて來たのであつた。長春ではそのとき一夜を過ごしたが、そこはまだ純粹の支那風の街であつた。これは大正三年

のことであつたのであるから、それも當然であつたのちがひない。次には大正十三年に満鐵から講演を依頼されたときに、同じく朝鮮を通つて奉天にゆき、それから大連に赴いて、歸路再び同じ道に戻つて來た。この頃にしても今とはよほど趣きを異にしてゐたので、その一端を示すためにもと思つて、その際にしるした紀行文を次に載せておきたいと思ふ。もはやそれから二十年近くを経てゐるので、現在のありさまと比べてその相違を知るのも、何かの参考にはなるかも知れないと考へるからである。

奉天まで

ことしの夏はどこも早魃に苦しめられた。梅雨期にはひる少し前から雨が降り始めたとは云ふものゝ、間もなくあがつてしまつて、から梅雨のもとにすんすんと暑さを増し、七月の初め頃には、もう眞夏のやうな炎天が続いて、久しい間一滴の雨も見ないやうになつた。地方によつては水田の稲の植付けも出來なかつたし、又震災後のバラック建築に充たされてゐる東京では、トタン屋根の熱氣に蒸しゆだるやうな暑さを感じるといふ有様であつた。

あつた。

私がこの東京へ出て、滿洲ゆきの準備をとゝへたのは、丁度七月の半ばであつた。十三日の夜に開かれた「緑の斜面」の出版記念會に出て、翌日はすぐに出立しようと思つたのが、或る事情で一日遅れ、十五日の夜行下の關行に乗つた。その日も特に蒸し暑かつたが、晝頃から一月ぶりに驟雨のやうな雨を降らせたせいも、夜になつてはよほど凌ぎよくなつた。さうして翌日も曇り空でいつになく涼しかつたのは、仕合はせに思はれた。

私と同じく滿鐵主催の夏季大學の講演に赴かれる筈のK博士を、同じ寝臺車の少し離れた座席に見出したのは、その朝眼醒めて洗面所から戻つて來た折のことであつた。お蔭で長い汽車のなかでも退屈しないで済みさうである。K博士といろいろ學界の話、旅行の話、朝鮮滿洲の話などする。

下關から關釜連絡船へ乗つたのは、もうその日の夜の十一時であつた。關門海峡の點々とした燈火を後にして船は出發する。汽車のなかで多少心配してゐた低氣壓ももうすつかり通り過ぎたせいも、海も靜からしい。風呂にはひつてすぐ寝る。

翌朝眼ざめたのはまだ薄ぐらい夜明であつた。さくさくと波をきつて走る汽船の音。どこの邊りか知らんと、窓掛をあけて見る。

夜の驟雨

霧が海峡に吹かれてゐる。

島山のすがたも淡い。

釜山に着いたのは朝の八時頃であつた。こゝはひろく丘岬に囲まれて水も深さうない、港である。此邊一帯は寫眞は撮れぬと云ふことで、旅行の記念を寫眞にでも残さうとしたが斷念せざるを得なかつた。

白衣の朝鮮人がたくさんに棧橋や停車場附近に立つてゐる。海を渡つて來ると、もう邊りが内地とはちがつた趣を感じさせられる。

汽車に乗ると、新聞記者がやつて來た。時間があつたのでこちらから朝鮮の情勢など訊く。

「朝鮮の内地にはまだ教育も十分普及してゐると云ふわけにもまわりませんが、さて朝鮮

人を教育するについては、いろいろ問題があります」

と記者らしい意見を吐く。朝鮮人は非常に語學に達者であるとか、政治法律などを學ばせると生意氣になつて困るとか、一體彼等は科學などに向くかどうかとか、乃至朝鮮の統治問題などを説く。私は親しく彼等に接しその様子を知りたいとも云つた。

一時間ばかりして汽車が出る。廣軌道だけに車體は大きく頑丈で又立派ではあるが、速度を増すとそれだけ大きく揺れるのは困る。同車内の客はK博士と私との外に、もう一人分の荷物が置かれてあるきりである。

洛東江といふかなり大きい河に沿うて走る。夏だけに朝鮮の山々もあをい。

あかく濁つた水ながら、

洋々とたゞへた大江が

二つ合流する

三叉地のあをい草原。

もう十年ばかり前に私は歐洲からの歸路こゝを通過したことがある。五月の末であつた

が、山々はもつと積く兀げてゐたやうに覺えてゐる。氣をつけて見ると、その以後に松の苗木が植ゑつけられたらしい。平地にはポプラが著しく多く眼立つが、これも大方近年育つたのであらう。

ポプラの木、

ポプラの木、

朝鮮慶尙南道の

江畔につらなつてゐる

ポプラの木、

ポプラの林。

ポプラもこゝで見ると何だかさびしい。樹木の何もなかつた土地に、生長の早いものとしてそれらが植ゑられたことはいゝが、そこに奥ゆかしさのないのが物足りない。

ポプラに圍まれる一村落、

藁を伏せたやうな低い朝鮮家屋、

瓦石を積んだ塀が

そのまはりを

川べりにぎざぎざとうねつてゐる。

田舎にある朝鮮固有の家々はいかにも原始的に見える。どう見てもそれはたかだか家畜小屋としか思はれない。あれでも冬は温突を焚いて暖かいといふことだけでも、夏は暑くてとてもたまると思ふ。

粘土細工のやうな

暑くるしい家々が

緒つちのくぼみにかたまつてゐる

朝鮮内地。

汽車が進むに従つて土地がだんだんに高くなる。朝鮮の土はどこまでも赭い。私はスケッチ・ブックを取り出して寫して見ようと思つたが、汽車が走るので、やはり思ふやうにはゆかぬ。

土があくまでもあかい山、
點々として小松が生えてゐる。

中腹に放たれた牧牛いく頭。

陽が照つて来るに従つて、かなり暑くなつた。汽車のなかで汗がにじみ出る。

新墾地の田畑でんぱたの間に

山の斜面から

ころげ落ちたらしい

兀々とした黒い岩塊。

すべてはまだまだ原始的である。併しそこには一度ひらかれようとした過去の文明の瘦
せ亡びた姿を残してゐるだけに、處女の潤澤を缺いてゐる。

乾いたしろい耕地、

そして、保護色のやうに、

しろつぽく曝された

あはれな薬家。

「緒い土いに芽いぐいむものつて云ふ小説を、君は讀んだことがありますか。あれは小説としてい
いかどうか私は知りませんが、朝鮮の事情や思想をなかなかよく書いてゐますね」

とK博士が私に云はれた。私はその著者に或る處でちよつと會つたことのあるのを思ひ出
すだけであつたが、ともかく朝鮮人の内情に通じて之を材料にしたなら、いろいろおもし
ろい問題があるにちがひないと思はれた。汽車で旅行して通るだけでは、何にもそれらに
觸れるわけにはゆかない。

白い服を

ひらひらと寛ろげなびかせて、

田野をゆるゆると歩いてゐる

朝鮮土人がある

鍔のひろい朝鮮帽子をかぶつて、

くろい紐を顎の下へ結ゆひ垂れて、

のんきさうに

汽車の停車場に立つてゐる人たちがあつた。

秋風嶺、深川と云ふやうな名の

小さな山間驛の構内に、

わづかに植ゑてある紅紫の草花、

それはさびしい亡國の土にかざられた

一つの祭壇のやうに、

旅人の眼にうつるではないか。

あらゆる感傷的な古朝鮮が

やがて滅びゆかうとするとき、

わたしたちは、

新たに生れ出る何ものを

そこに待ち得たのであらう。

日本内地と同じやうに、この邊もひどく旱魃が続いてゐるらしい。一面の耕地は乾いて畑のやうになつてゐるが、畔に仕切られてゐるので見ると、水田であるにちがひない。しかももう七月も半ばだといふのに、まだ稻も植ゑつけてないのはむしろ憐れである。稍々低い處だけには白く濁つた水を湛へて苗が植ゑられてあつたものゝ、それもまだひどく小

な

草山にも、道路にも

あかい朝鮮牛がゐる。

よごれた白服の土人が

もの擔いでゆく悠長さ。

すべてが悲しいものゝなかに、この朝鮮牛だけは何となくたのもしさを覚える。

暑いのに汽車に揺られて私たちはだいたい疲れた。ボーイが時々熱い手拭ひをもつて来てくれるのもあり難い。朝鮮人らしいのがアイスクリームを賣りに来る。

車中にはいつの間にかもう一入の乗客が若い二人の女を對手にして話をしてゐる。男は

きのふ山陽線の汽車にも乗り合せてゐた四十前後の人で、和服で羽織袴をつけてゐる。辯護士らしい處もあるが、それにしては少し呑氣な風でもある。K博士は畫家ぢやないかとも云ふ。

「よく美術院あたりの日本畫家があんな風采で旅行することもあるんですが」

と云はれたが、その舉動から見るとどうも藝術家らしい處はない。今若い女たちと話し合つてゐるに到つて益々わからなくなつてしまつた。女の一方は女學生らしくも見えるが、夏休みで朝鮮に移住してゐる兩親のもとにでも歸るのであらうか。併し年恰好のもう一人の連れの女は遠慮もなくずゐぶん聲高に例の男と話し合つてゐる。よほど世馴れた容子の女だ。

「話しぶりからは女優のやうにも見えますな」

「さあ、女優にしては着物があんまり地味で平凡ですわね」

「どうもわかりませんな」

汽車旅行の退屈さの間には、こんな謎をものすきに解かうとするのも時にとつての興で

ある。

女達は京城で降りてしまつた。そして男が一人残つた。一體彼はどこまで行くのだらう。京城で暫らく停車してから、再び私たちの汽車が出發したのはもう日暮であつた。それでもまだ晝の暑さがなかなか減らない。郊外にこたこたした家がしばらく續く。

軒のまへに蕙をしいて、

あぐらかいて涼んでる労働者たち、

白衣にあかい袴をつけた

子どもたちは

道路で手をあげてゐる。

夕闇ちかくなつて俄かに雨がふり出した。今までの蒸し暑さが漸く去つたやうである。

驟雨が汽車の窓をたゞく。

土がしめる。

民屋の藁屋根も

やがておなじやうな色に濕める。

K博士と向ひ合ひの寢臺に寝る。例の男が隣に寝る。

翌朝眼ざめたのは、もう新義州に近い邊りであつた。顔など洗つて着物を着換へた頃、私たちは鴨綠江の長い鐵橋を渡つてゐた。食堂にゆかうとすると、隣席の問題の男が

「これから安東縣で税關検査がありますから、それが済んでから食堂においでになるがいでせう」と云つてくれる。「さうですか、あり難う」と答へると、

「どちらまでおいですか」

と向うから口を切る。K博士がそれを承けて

「奉天までです。……滿鐵の講演にたのまれてるんですから、それから大連へ行くんですが、……そちらはI君、わたしはK……です」と云ふ。

「わたしも大連へまゐります。實はきのふあちらの席で話してゐました女たちがあなたがお二人のお名まへを承知して居つて、向うでお噂さしてゐましたつけ……」

と云ひながら、懐から自分の名刺を出して私たちに渡す。「何々日報社社長何々、大連市何々」と記してある。はゝあ、新聞社の社長だつたかと彼の風采と引きくらべて始めてきのふからの問題の一部が解ける。

「大連で漢字新聞をやつてゐましてな。實はこの二月に郷里に歸つて代議士の運動もやつたんですが、失敗してしまいました。それで今度又大連へ歸るんですが、船よりこちらの方が幾らか早いのでこちらを廻つてゆきます。……きのふの女たちのうち一人は東京で知り合ひのもの娘で、下關で紹介されたもんですから、……いろいろお二人のことも知つてゐましたつけ」

と、又繰返す。

「さうでしたか。實は我々二人の間であの人たちの身分が問題になつてゐたんですよ。……」

「はゝゝゝ……一體どんな人たちなんですか知ら」

とK博士がきくと、彼は語を續いだ。

「いや、一人は今お話した通り、東京でもと知つてゐた醫者の娘なんですが、もう一人は

その友達で、謡曲の先生をしてゐるんです。あんなに若いのにたくさんお弟子をもつてゐるので、今度も夏のうち京城へ教へに來たのだと云ふことで、きのふもあれらが降りるとその連中が大分迎へに出てゐましたつけ」

「どうりで……わかりました。どうも女學生にしてはあんまり世間馴れてゐるやうだし、女優ともつかず、さつぱりわからなかつたんですが……。謡なら私も少しはやつてゐるんですけどが……。何流ですか。觀世ですか」とK博士が立ち入つて尋ねる。

「さあ、謡のことはさつぱり知りませんで……。やつぱり觀世とか何とか云つてたかも知れません。謡ばかりやつてゝもつまらんから、これから繪をならつて、その方で立つんだと云つてゐましたつけ。でも、今の女はなかなか若くてもしつかりしたもんですな。私にも頻りに謡をならへと奨めてゐましたが、でも私ではあの女のまへに坐つて、それを先生にするのはちよつと具合がわるくて困りますな。はゝゝ……」

と頭へ手をやつて苦笑する。

「謡もなかなかいいですよ。近頃は女の謡もなかなかはやりますが、でも女ではやはり男のやうにはゆきませぬね」

「若い女ぢやあ、先生にゝるのに困りますが、年をとつちや尙ほ更だめでせう」

「やはり年をとつた方が聲に寂びが出ていゝんです」

とK博士はどこまでも眞面目である。

「あれで、男のお弟子も大分あるつて云ふんですから、えらいもんですな」

「何しろ京城まで教へに來るとはたいしたもんですね」

「あれの兄さんが文士で、今度出た何々とか云ふ雑誌の編輯をやつてゐるさうです。まあ、あの連中のお蔭で、きのふは汽車のなかを退屈せずすみしましたよ」

こんな話の間に、汽車はもう安東驛に停車してゐた。税關の人たちがどやどやとやつて來て、ちよつと鞆をのぞいて、すぐ白墨で記しをつけてゆく。甚だ簡單である。

食堂で朝食をすませて席に戻ると、また例の先生が話し始めた。日本人が滿洲へ來ても、お五同志の交通だけで、さつぱり支那人のなかへはひり込んでゆけないこと、支那人と競

争してみんな負けること、日本の勢力をひろめるにはもつと支那の内部へ突入する必要のあること、それには先づ醫學生でもたくさん養成して醫者を各地に振りまくこと、何々何々と新聞社長らしい氣焔を揚げ出した。私は窓外の風情がもう朝鮮とはよほど變つてゐるのを眺めながら、それらを黙つて聞いてゐた。

水田がちつとも無くなつて、どこも高粱の畑ばかりである。ポプラの代りに到る處楊樹が眼につく。そしてのんきな白衣が、こゝでは孜孜とした藍色の支那服に變つてゐる。ちよつとした國境を超えたばかりに、自然も人間もすべてが斯うもちがふものかと感ぜられる。

K博士は日露戦争のとき一年志願出身の將校として召集に應じ、第三軍司令部付の翻譯官になつて、この邊まで來た頃、講和條約が結ばれたので、それから司令官に従つて鳳城まで視察に行つたと話される。

「ひどい路を馬に乗せられて、そのときは大分弱りましたが、まあほんとの戦争には出ず、見物に過ぎたやうなものでした」

とも云はれる。二十年後の今とくらべていろいろの感慨もあることであらう。

本溪湖の炭鑛を通り過ぎると、漸く滿洲の大平原が展開してくる。高粱のつやつやした葉が陽に照らされて光つてゐる様など、さすがにこゝも夏の自然である。

泥地のくさむらに

黄いろい小花がむれさいてゐる。

くろ豚の幾百頭が

放牧の馬とともに

草食んでゐる。

奉天についたのは、その日の午後三時であつた。滿鐵の人たちに出迎へられて、自動車で瀋陽館といふ日本宿にゆく。思ひがけなく昔の同窓の友I君に出遇つた。

「滿洲は今丁度雨期でして、之がもう少しで終るといふんですが、どうもこの頃は毎日鬱陶しくていやになつちまひます」

などと説明をきく。なる程、今晴れたかと思つてゐると間もなく曇つて來て、やがて雨さ

へしぶくと云ふ有様らしい。新聞記者がやつて来る。

夕方、I君に案内されて醫科大學を見る。もと南滿醫學堂と稱したもので 設備もかなりに整つてゐる。

部屋のなかでは蒸し暑くて汗が湧いて来る。市中眺望のために屋上に出ると、また雨が一頻りやつて来た。空氣がしめつてゐるせいで、汗がちつとも乾かない。少し町をあるいて宿に歸るまでに、着物がぐつしよりと汗に浸つてしまつたのには寧ろ驚かされた。

夜は滿鐵の人や當地在住の多少縁故ある人たちに招かれて支那料理の御馳走になつた。「公記飯店」といふ料理屋の名も何だか異様に思はれた。

翌朝眼がさめると、支那人のもの賣が町を呼びあるく聲が高く低く頻りに聞こえる。何といふのか私にはさつぱり判らないがそれだけに異境に來たと云ふ感じがしみぐと起る。後でI君に聞くと、品物の名だけを日本語で云つて、それに買々と支那語をくつつけるので、花賣ならば、花買買といふのださうである。その買々が長く語音を引いて、「まいま あーい」と譜節をつけて呼ぶのである。

なかに、針金を張つたものを、「じやーん、じやーん」と鳴らして歩くのがある。あれは何かと聞くと、理髮屋ですと宿の女中が云つた。ばかに長い把柄の人力車や、水を運ぶ一輪車なども妙に變つたものである。

この宿の附近は、併し滿鐵附屬地であつて日本人が住んでゐるから、店などは變つてゐないが、少し離れた城内へゆくと、それはまたまるで違つた世界が私たちの眼のまへにはられる。滿洲で純粹の支那氣分のある町はこの奉天城内であるといふことだが、支那を知らない私には一々がめづらしかつた。

朱縁緑地の彩板が

兩側の商家の軒に

縦に、また横に並び掲げられてゐる。

凹凸のおほい泥路、

牛車馬車の頻りな雜鬧、

支那労働者らの喧ましい叫音

なんと云ふ眼まぐるしい

混亂の巷街であらう。

奉天城内の夏の眞晝

炎日にさらされたこの大路たいろせうろ小路を、

時にしろい傘をかざして

紅顔翠黛の支那少女もゆく

城内の中央にある舊の宮殿も見たが、今は憲兵隊の衛所になつて荒れてゐる。

清朝祖廟の

青藁に草が生えてゐる。

空虚にのこされた内殿。

支那衛兵が愛嬌めいて、

玉座の椅子を指しながら、――

「腰かけてごらん」と云ふ。

その夜の講演をすませてK博士と私とは翌日大連への汽車に乗つた。

朝鮮から奉天までの路を歸りにもう一度通つて幾らかゆつくり見てゆかうと思つてゐた私は、歸りがけに圖らず胃をわづらつて奉天で臥床して數日を宿屋の一室に費してしまつたので、再び慌ただしい汽車旅行を續けて素通りせねばならぬやうになつた。またいつになつてこの境域を踏む機会を得られるかわからない私は、ともかくもそれを残り惜しいことと思つてゐる。

註 この文中、K博士とあるのは桑木嚴翼博士のことである。

(大正十三年十月)

大連の夜

一體滿洲へ来てどの日本人に遇つて見ても、その云ふ處は、滿洲をどうするの、斯うするの、之をうまく經營するにはどうしたらよいとか、何とか、何とか、一とかどの政治家のやうな話にすぎない。みんな自分の持ちものをいぢくり廻はすやうな氣になつてゐる。奉天へ着いても、大連へいつても、すぐ新聞記者がやつて来て、滿洲についての感想はと質問を向けられる。まあ暑いとか何とか、一と通りの時候の感じの外には、いつもこんな問題に對する答を期待してゐるのだ。それに何とか應じてやりさへすれば、いかにも識見があるかのやうに吹聴されるのである。新聞に出る何々氏談といふもの、おほよそはこの類に外ならない。まだろくに滿洲の事情も見もしないで、概念的な政治教育談をやつたとて、それがな程の價値をもつのであらう。しかもこんな空氣のなかに生活してゐると、誰も彼も、猫も杓子もこんな話をしなくてはならぬやうに感じ、さうして實際またさうなつてしまふのらしい。ともかく私にとつてそれは不愉快千萬である。總じて殖民地氣分といふものが、

こんなのを基調にして醸されてゆくのであらう。殖民地にしても、最初から誰も人間のゐない土地へ行つて開拓すると云ふのならよい。だが、もともとから住んでゐる人間のある場處へ来て、どうのかうのと干渉どころか、主人顔して采配を振りまはされたのでは、いかに愚鈍のものだとして佛がほしてばかり居られたものではあるまい。借間人なら借間人らしくしなくてはならぬ。その上に手を出すなら、親切氣から取りはからはなくてはならない。お隣り同志で、さう構はずにおかれるのは近所迷惑だと云ふなら、またやりやうもあるといふものである。さて、若しまた地球上の場處は抑も人間が共同して生存すべく與へられたものであると云ふ大きな見解からであるなら、私は之に超したことはないと思ふが、そのときにはほんの手道具ではなく、もつとしつかりと土地を愛してめいめいに扶け合ふべき筈である。滿洲にゐる人たちの心のもち方が、そのどれでもないことが私には不愉快なのである。まして土着の支那人が耳にして一層の不愉快さを感じぬわけではない。他人に不愉快を與へるやうな話を誰も彼も誇らしくやつてゐるとは何といふことであらう。私はそんなことをよそにして、滿洲そのものを見ればいゝのだ。ただ私には肝心の支那語がわからない

い。支那人に親しんで話をきくわけにゆかない。それは止むを得ないことでもあるから、せめて私は聾のつもりで満洲を旅行しよう。それで、よけいなことも聞かずにすむわけである。

私はホテルで夕食をたべながら、こんなことを考へつづけてゐた。夕方からこのホテルの屋上で納涼園が開かれることになつてゐるせいか、食堂は存外に寂しくひっそりとしてゐるのであつた。

食事を終へて散歩に出かける。ホテルの前の廣場は大連の中心點であつて、市役所、民政署や逓信局や英國領事館や朝鮮銀行などの大きな建物が圓形に取り圍んでゐるたかに、屋上の美しい燈光で飾つてゐる賑かな明るいホテルは一際目立つてそこに立つてゐる廣場には散歩道がぐるぐると通じてゐて、いゝ頃の木立が植ゑ並んでゐる。ホテルを出ると、それを目掛けて支那人の車夫が俵を挽いてすぐに寄りついてくる。そして

「俵よろしか」

と妙なアクセントをつけて、こちらの顔を見上げる。奉天でも大連でも、この支那車夫

がかなりが多い。どこの役所にも、會社銀行にも、旅館、料理屋、遊藝場にも、公園にも苟くも人の出入の稍々多さうな場處には、必ずその門前に幾臺かの客待車夫を見ないことはない。あれでよく客があるものだ。一體いつまで彼等は氣長く待つてゐるのだらうと、こちらからよけいな心配もせずにもられない程である。それに俵ばかりではなくて、一頭立二頭立の馬車もあつて、それらの馭者も到る處に客待顔をならべてゐる。おまけに俵賃も馬車賃も日本内地に比べてはお話にならぬ程廉いのであるから、出あるくには至極便利ではあるが、一體彼等はよくそれで過ごしてゆけるものと、一應は不審に思はれないでもない。だが、支那の勞働者たちは一日に十幾錢もあれば食べてゆけるのだと云ふ話を聞いてなる程それでこそと肯かれるのであつた。だから、滿洲では日本人は食ふに困つてもとても俵を挽いて生活してゆくわけにはゆかないさうである。そしてまた支那に勞働問題の喧ましくならないのもこの故であると思はれる。

散歩するつもりで出た私はかぶりを振つて俵をことわつた。ところがホテルの正面の石段を下りて往來へ出ると、また一人の別な車夫がやつて來た。今度はいくら要らぬと云つ

ても後からついてくる

「俵、たいへんやすうい。浪速町、十銭」

と云つて、いつまでも薦める。あまり面倒でもあり、又私には例の氣の毒のやうな感じもあつたので、とうとう浪速町まで乗ることにする。

浪速町といふのは、東京の銀座と云つたやうな一番繁華な通りで、殊に夜は夜店がぎつしりと並んで賑かな處である。人道はどこも一杯な人込で、日本人と支那人とが入り交つてぶらついてゐる。兩側の大きな店は日本ののであるが、道ばたに並んでゐる夜店の大部分は支那人が出してゐるのである。

「以前は日本人のももつとあつたんですが、だんだん支那人に壓されてしまふもんですから、どうも商賣は支那人にかなはないやうです」

と、私は前日の夜、始めてこゝへ案内されたときに聞いたのであつた。やはり生活費の廉くてすむ支那人は商品を賣るにしても、それだけ値段を安くすることが出来ること云ふ理屈らしい。だが、彼等は盛んに掛け値をいふ。どどのつまりは安く値切られるにしても、出

來るだけは掛け値をして儲けようといふのが、彼等の商賣の最大の秘訣なのである。

「品物を値切つてやるのもなかなかおもしろいものでしてね。時々、それがおもしろさに要りもしないものを指して、いゝ加減な値段をつけてやると、すつぱり負けられて面くらふやうなことがあります」

と、やはり昨晚の話であつたが、その時のもう一人の連れが

「なに、こつちもするくなつて、そんな時はそうつと知らん顔して行つてしまふんです」と云つた。どうもこれは支那人をばかにし過ぎた悪戯だと私は思つたが、

「一つ、何か見つけて値切つて見ませうか」と彼が云つたときには、果してどれ程負けるものかを試めしても見たい私の好奇心が動いた。勿論、負けたら買ひさへすればいゝのであつたからである。

何かないかと探してゆくうちに、ロシア人の女が物賣つてゐるのも見た。革命亂後にそんな人たちが大分滿洲にはいつてゐるらしいのであつた。暫らく行くと羽團扇を並べてゐる店があつた。これなら一つ買つてもよいと思つて値段を聞いてもらつた。何鳥だか知ら

ぬがまつ白な羽で出来た團扇があつたので、いくらだと聞くと、最初七十銭と云つたのを五十銭まで負けたが、もうその上は値引しないと云ふ。

「もつと負ける筈なんです、買つてゆきさうに見えたから、もう負けないんでせう」とのことだ。孔雀の羽がある。それを聞くと一本十三銭だと云ふ。

「五銭につけて見ませう」

と云ふので話すと、これは八銭で北京から買つて来たんだから、どうしても十銭までしか負けれぬと、正直らしい打ち明け話をする。私はともかく大連の夜店の記念にと思つて、團扇と孔雀の羽を二本宛買つて歸つたのであつた。

實は、聾な私ひとりでは大連の町をあるいても、さつぱり立ち入つた様子はわからないわけであつた。やはり誰かに案内してもらふのが好都合でもあるやうだ。尤も昨晚のやうな人たちだけなら一向に自任政治家らしい話も出ず、私もそれほど耳を塞いで聾になる必要もないから、氣樂でいゝ。それはT大學を卒業した理學者たちで、私がこゝへ来たから一度會合したいと云つて集まつてくれたのであつた。六人ばかりの若い人たちの集まりで、

私が直接に教へたわけでもなかつたのに、T大學にゐたと云ふ關係だから斯うして寄り合つてくれるのは、私には一番なつかしくうれしかつた。大連にゐたうちにあのロシア人が建てたと云ふ立派な滿洲館へも招待をうけて、粹な日本料理のご馳走にも預つたけれど、さう云ふ儀禮的な集まりでは、心もちが硬くなつておもしろくない。滿鐵から招ばれて滿洲に来ながら、こんな風な考へであるのは濟まないことかも知れないが、これも自分の偽らぬ心からであるとすれば、仕方のないことでもあらう。

ともかく私はそのT大學の卒業生たちとの會合を通じて大連の夜の一小部分を見ることが出来たのであつた。私はつまりその夕方、講義をすませてホテルで風呂を浴びると直ぐに、もう玄關に待つてゐた 人に連れられて、辻馬車で或る一軒の大きな支那料理屋に行つた。この料理屋の様子は大小の相違があつても、先づ東京の神田邊にあるのと大差はない。三層樓の階上へのぼつてゆく階段の構造、その段々に横に鏡を嵌めてある處など例の支那式である。

階上の一部屋に圓卓があつて會者がその周りの席を占める。やがて、その上にいろく

な菓品、點食が並べられ、大碗、小碗が順次に運ばれる。支那料理をあまり食べたことのない私には、品物やら食べ方やらの説明を一一尋ねなくてはさっぱり判らないのであつた。でも奉天で一度たべたことのあるものだけはなる程また出たなと云ふくらゐに思ひ出せる。燕の窩だとか鱈の鱈だとか、支那人はなかなか凝つてゐる。燕は海燕で、海藻をとつて来て岩隅につくるのだといふことだが、どうして彼等がこんなものを好んで食べるやうになつたことだらう。食品名に註釋のついた紙をもつて来てくれたのを見ると、そこにはいろんな料理が並んでゐるのに先づ一寸驚く。小碗の部に無慮百十幾品、大海碗の部に四十七品、大碗の部に八品の名がずらりと列ねてあつた。名まへも勿論支那式でおもしろい。通天燕菜とあるのは純粹の燕の窩の料理で、芙蓉燕菜といふのは卵子の白味を下敷にした燕窩と註してある。通天は純粹といふことで、芙蓉は卵の白味のことであらうか。十錦魚翅はいろいろのもの十種を入れたふかのひれとある。炒裡背絲は豚の赤肉を絲切にしたのを油で熬つたものとある。隨分むづかしい。川腰花は豚の肝の汁物、川丸子は豚をまるめて煮た汁物であつて、川は蓋し汁を意味し、腰は肝を意味するのであらう。私たちが見ると判

じものよりもつとわからない。私の隣席の一人が給仕に尋ねては當夜の品々をこの紙片にしるし付けてゐたが、しまひには續々出るので厄介さうに有耶無耶になつた。ともかく品數が多いので最初からうつかり澤山食べると後のものは腹にはひらなくなつてしまふ。餘つたのはみんな一つ鍋にぶちこむのだと誰だか云ふ。併し沸騰させて長時間煮るのだから、何もそれを氣にするには及ばないのかも知れない。

「唄をひとつうたはせようかと思ひますが、いかゞでせう」

と幹部役の一人が遠慮しながら私に訊く。私の「どうぞ」と云ふのを待つて、彼は下へ頼みに行つた。暫らく経つてから女がひとりやつて來た。白い上衣に白いズボンを穿いて前髪を下げてゐるせいか、いかにも少女らしい。「あれで幾つぐらゐでせうか」といふと、

「もう相當には年がいつてるんでせう」との答である。

聞いて見ると十八だと云ふことであつたが、態度もかなり無邪氣で快活であつた。

「唄をうたふときには、きつとうしろを向いてしまふんですが、どう云ふつもりかわかりませんな」

「口をあいて歌つたりするのを見られるのが、やつぱり羞かしいと云ふわけらしいですね」そんなことを話し合つてゐるうちに、胡弓弾きの男がもう一人這入つて来た。向うの椅子に腰かけて胡弓を取り出すと、女はいまの話のやうにその傍に、こちらへ背を向けて立つた。さうして胡弓のきいきいふ音に合はせて、すばらしくたかい調子の聲で何やらうたひ始めた。

胡弓の響に消されて聲が本當には聞こえない程である。「支那のうたには、どこか亡國的な哀音が含まれてゐますな」

と一人が云ふ。胡弓といひ、尺八と云ひ、どうもさう云ふ心もちがしないでもない。一と頻りうたつてしまふと、女は皆のゐる圓卓へ戻つて来たが、胡弓弾きはその儘さつたと行つてしまふ。

誰も支那語はあまり上手でなささうで、簡単に品物の名まへを女にきくぐらゐがせいぜいであるので、彼女も聊か手もち無沙汰の氣味らしく、席を立つて別の部屋などを歩きまはつてゐるやうであつたが、また戻つて来て林檎を剝いたり、支那酒をつぐくらゐの愛嬌

を振りまはして、それからあつさりと歸つて行つた。もう腹一ぱいになつた私たちもその後から料理屋を出て町を歩いた。

「阿片を飲むうちを見てゆかうぢやありませんか」
と、年上の一人が案内役をする。

「僕もまだ見たことがないんですが」
と、二三人が云つた。

「ぢきそこにあるんですよ」

と、往來を二つばかり曲つてその前に出た鴉片公賣何何といふ看板がかゝつてゐる。

「こんなうちが澤山あるんでせうか」

「さうあるわけではないのですが、内所で飲むのは随分あるやうです」

狭い入口を這入ると、銀冶屋があつて二三人の職人が汚ないなりで仕事をしてゐた。そのまへを通つて一層狭い階段があがる。木がでこぼこに減つてゐて煤埃が一杯にたまつてゐる。夜の電燈がうすぐらいからいゝやうなもの、晝間ではとても堪るまいと思はれ

る。階段の上の部屋が阿片公賣の店である。真中に帳場みたいな處があつて、二方の壁際に一段たかく疊を敷いた細長い臺があり、その上に寝ころんで阿片を吸つてゐる二三人の人たちがゐる。隣り部屋にも真中の廊下を挟んで兩側に同じやうな疊敷があつて、ごろごろと寝てゐる人間がある。始めて見た眼には何となく薄氣味わるい。

疊敷と云つても甚だ粗末なもので、それが、壁に接してゐる處に、長い横木の臺が取りつけてある。これを枕にして寝るのだから、足をこちらに向けてゐるわけである。暑苦しい夏の夜のこと、肌脱ぎになつて支那ズボン一つで寝てゐるのが多い。大方は勞働者らしい人相でもあるが、なかにあを白い顔をしたやさしげな若者もゐた。ふとい筒煙管の中程に阿片をつめる口が付いてゐて、そこへ阿片をつめて、アルコール・ランプで火を點けるのである。暗い壁隅に黄いろいランプの火で照らされてゐる顔が見えるのも物凄氣がする。

帳場の傍の臺で、やはりアルコール・ランプで阿片を煮てゐる男がある。眞黒に錆びた眞鍮の匙のなかに阿片が沸々と泡だつて黒褐色の液になつてゐる。だんだんに煮つまつた

のを指先きでまるめて容器に移す。「これで三十錢ばかりの阿片だ」などと説明してくれたり、なかなか愛想がよい。阿片がだんだん利いてくると、恍惚とした夢心地になつて寝つゞけるのださうである。さうしてすつかり醒めきると氣もちがわるいので、また飲まずにはゐられなくなるのだと云ふ。一晚に阿片を八九圓も飲む人もゐるといふ話である。これではほんとの勞働者にはやり切れまいと思ふ。

私は何だか異様な世界を覗いてゐるやうな妙な氣になつてしまつた。うすぐらいやうな心もちで黙つてみてはゐたが、皆の後について外に出てからほつとした。「もう一つ支那風呂を見てゆきませう」と云はれて、その後へついて行つたが、この風呂屋は浪速町通りにあつて、なかなか大きな立派なものであつた。廊下のやうな入口を這入つて行つて、

「觀々」

といふと、こゝでも愛想よく見せてくれる。

風呂場は頭等とか一等二等とかに分れてゐる。混浴の場處は日本の錢湯と大差はないやうであるが、その傍に寢臺があつて、風呂あがりによつくりと寝ころんでゐたり、床屋が

あつて辨髪を結つたり、顔を剃つたりしてゐるのが變つてゐる。湯からあがつた儘、素裸で大びらに廊下を歩いてゐる支那人もあつた。上等の方になると、西洋の陶器風呂がめいめいに備へつけてあるだけがちがふ。家族風呂と云つて一區劃のなかにそんなのが二つも据えつけてあるのもあつた。

「以前はお茶を飲ませる部屋だの、碁将棋などをやる部屋だの、いろいろあつたのですがこの頃はなくなつてしまつたやうです。私も二三度はひりに來たことがあります、二十錢出せば頭等の風呂へ這入れてゆつくりできるのが便利です」

と案内役の先生が云つた。ともかく支那人の生活にはすべてゆつたりと呑氣な處のあることが之を見てもわかる。苦力收容所などへ行つたときにも、諸處の樹蔭に小鳥の籠をつるして、その下で晝寝をしてゐるのを見て、それを感心もしたし、その外いろんな場合に彼等の氣長さを見るのであつた。之が彼等の長所でもあり又短所でもある。大國的な氣もちと云へばさうでもあり、又生活必迫が痛切でないだけ神經衰弱的に陥らないのだと云へば、さうかも知れない。

風呂屋を出てから、前に云つた通り浪速町の夜店を見て歩いたのであつた。併し私がこの書き出しにしるした次の晩の獨り歩きでは、古本屋の店でおもしろさうな本を探さうとするにも、十分の用が足りず一向に困つてしまつた。仕方もなくして私はとうとうその儘ホテルへ歸つてしまつた。そして例の屋上納涼園へあがつたら、さすがにそこには涼しい風が通つて、噴泉のしぶきをそばしてゐるのも愉快である。西洋婦人のすらりとした姿、支那の子供のかはいげな格好。さうして大連の夜の燈光が眼下に點々と並んでゐるのも美しい。これだけの町が今の有様に發展して賑はつてゐるのも、謂ゆる滿洲經營のお蔭であるとするれば、そして私がいま屋上に立つてそれを眺めることの出来るのも、それと間接には繋がり合つてゐるのだと思へば、あながちすべてを否定してはならないのであらう。私は勿論それを否定しはしない。ただ聞きたくないことを聞くまいとしたゞけである。だが人々よ、この土地からその謂ゆる滿洲經營を取り除けてしまつたら、果して何が残るであらうかをよくよく反省してみるがよい。

部屋に歸つて私は寝仕度をした。窓をしめにゆくと、山を負うて滿鐵病院の老大な赤煉

瓦の建物が暗いなかに見える。すぐ前には街燈の光に照らされてアカシヤの並樹の繁つた
アスファルトの道路が静かに横たはつてゐる。偶々辻馬車の馬の蹄の音が調子取つて高ら
かに聞こえてくるのも夜の都會の一つのわびしさである。私は寢臺に横たはつて、滿洲で
の旅の日取りなどを心に思つてみた。

(大正十三年十月)

鴉片賣房

埃まみれな 煉瓦の舊屋の

磨り減つた 狭い階段をのぼる。

夜の電燈が くらい。

鴉片賣房の奇態ないく間。

暑夏の或る宵であつた。

鴉片賣房の 陋屋の階上に

怪奇な形色を わたしは見た。

灰いろの空氣、黒い呼吸、

そして偶々燃える 鴉片の赤い火。

壁隅にとりつけた

横木の臺を枕にして、

肌ぬいだ 労働者らが

寝ながらに 鴉片を吸つてゐる。

暗愴たる ひとつの世界。

鴉片中毒者の あをじろい皮膚が
黄いろい ランプの火とならぶ。
うすぐらい この部屋にこもる

ほのかな煙りのにほひ。

燻ぶつた眞鍮の匙に 沸々と泡だつて、

薬液のやうに

黒褐色の 鴉片が煮える――

鴉片が煮える。

喫鴉片、喫鴉片――

藍いろの支那服を著た

辨髪の ひとりが

鴉片を煮ながら こちらを向いた。

あゝ、人生に

恍惚とした夢をもたらずでもあらう

ふしぎな酔薬。

かれらは、もうもの倦い眼をして

しきりに 鴉片を吸つてゐる。

熊 岳 城

温泉宿は白壁塗りの建物で、ちよつとした木立にとり囲まれてゐた。宿に落ちついてともかくも湯に入つたが、客は割合ひに少ないらしい。もつとも土曜日曜にかけては、大連から出かける連中が多いとのことであつた。宿の前の木立ちの向う側には廣い河原の河流があつて、河原の砂地や流れのなかに河泉が湧き出るので、そのうちの數箇所板圍ひをしたり、湯槽がつくつたりしてある。誰でもそこで自由に湯を浴びることができるので、たくさんの子供たちなどそこで泳いでゐた。この子供たちは小學校の生徒で、先生に連れられて来て、この河原の縁のバラック建ての家に寄宿してゐるのだと云ふ。河流の向う側

には一團の支那人の群が馬をつないで、自分たちは素裸になつて、砂を掘つてはそこにたまる湯に身體を浸してゐた。さながらの原始的な自然でもある。

河原の對岸は見渡す限りひろい平原が続いてゐて、その遙か向うに一帶の山脈が延びてゐる。自然の涼風が河原を渡つて少しも暑さを知らない。私は蒸し暑い宿の部屋にゐるよりはと思つて、この河原の縁に坐つて、スケツチしたり湯に入つたりした。支那人が荷をかついで、アイスクリームを賣りにくるのも、また變つた愛嬌でもある。

私はこの温泉宿に二日を滞在した。まだ夜の明けきらない黎明に起きて行つて、河原の湯に浸つたときは、私に限りない詩趣を湧かせた。離れた湯槽にもう一人浸つてゐるものがあると思つて見たら支那人であつた。

あたりはひつそりとしてゐる。遠い空がだんだん明るんでくると、夏雲雀がもうそこらに飛びかはしてゐる。魚籃と釣竿とをもつて河原の縁を歸つてゆく支那人もゐた。私はすべてを忘れて、ぼつつりと別な世界におかれたやうな氣がした。ほつかりと立つ湯氣が河原に吹かれてゆくのも夢のやうなありさまである。

温泉宿から數丁離れた處に、支那人の一部落があつた。朝夕ごとにそこからキィキィといふ胡弓の音が盛んに聞こえてくる。私はその邊りにもいく度か寫生帳をもつて出かけた。ごろごろした石を積んでつくつた塀が兩側に並んで、楊柳の大樹が繁つてゐるのも、既に支那めいた感じを與へる。寫生帳をひろげると、いつの間にかたくさんの支那人が寄り集まつて來て、いろいろと話し合つてゐる。朝早い頃には、焚木を背に積んだ驢馬の一隊がこの街路を通つて町の方へ向つて行つた。晝過ぎの暑い最中になると、往來のまんなかの楊樹の蔭に蓆を敷いて、胡弓などを鳴らして涼んでゐる群が見られる。私の眼にはこれらの風物のすべてが畫趣をもつて映るのであつた。

三日目に私はこゝを立つて奉天にゆかなくてはならなかつた。宿の肥つた女將が書畫帖をもつて來て、いろいろの話をした。なかなか愛嬌がいゝ。十數年前に初めてこの土地で温泉宿を開いてから、寂しい場所ながら來遊の人たちに接するのを楽しみにしてこゝに暮らしてゐると云ふ。

「えゝ、もう私の肥つてゐることは、漱石さんの滿韓ところどころにも出てゐますので、

有名なもんです」

などとも云ふ。私はそんな話を聞きのかして、またこゝへ來がけに案内してくれた支那人ボーイに送られて、驢馬車に乗つて停車場に向つた。

(大正十三年十月)

温泉行

アカシヤの實が

あかく房々と垂れてゐる。

高粱の穂も もう出はじめた。

「温泉までどれ程あるの」

「二じゆ五町」と

支那人ボーイがいふ。

一頭の驢馬が 挽いてゆく

トロツコ馬車。

かはいらしいではないか、

驢馬のあゆみは。

わたしもそれに乗つて 温泉へ行つた。

ボブラとアカシヤとに囲まれてゐる

たつた一軒の 温泉宿。

木立をくゞつて 河べりに出ると、

さて、どことなしに

湯のにほひが ゆらめいてくる。

河原の あかい砂から

あつい湯が 湧くといふ。

腰張りの 板小屋の かげに、
おゝ、 温浴をする

そこばくの人たちが見える。

どこまでも 續く 高粱畑、

果しもない 平野のなかを

河原が ひろくくぎつてゐる。

だれが この河原に湧く温湯に、

自然の黙示を 攝受したことであらう。

ひろい河原を

しきりなしに 涼しい風がふく。

砂湯にぬくんだ

いくつもの 裸形裸身を
風が さらくとふいてゐる。

のんびりとした、

併し、なんとなくなたよりない

ものさびしさ。

温泉聚落の 兒童たちよ、

なんぢらの郷土は つひに遠い。

天地が 創まらうとするやうな

しづかな あかつき。

私は 河原に出て ひとり湯につかつた。

雲雀が すい〜と空へあがる。

あがつては落ち、落ちてはあがる。

籠さげて

夜釣りから歸る支那人、

河原を ちちわたつて

楊樹の蔭へ 隠れてゆく。

満人村落

アカシヤの並樹——

うすい朝もやのなかに、

薪木を 負うてくる

しく群の驢馬の鐸音すおともなつかし。

満人村落からは

胡弓の響きが もれてくる。

満人村落の しづかな晝。

大道小道の 楊樹のもとに、

何するともなく

圓座してゐる老若男女。

石ころを積んだ

でこぼこな塀が

すべての家をめぐらしてゐる。

満洲旗人の 一村落が

ひっそりと眠る 晝のしづけさ。

黙々たる一村落。

たま／＼ 驢馬がいなき。

豚の兒が啼き、

さうして土民が

原始樂を 奏するに過ぎない

寂寥たる 滿洲一村落。

哲學への思慕

哲學について私はさほど深く知つてゐるわけでもなく、たゞ時々その書物の一端に眼を觸れるといふ程度に過ぎないのであるが、それでゐて古來の多くの偉大な哲學者への、従つてまたそれらの人々の説いて來た哲學への、何とはない思慕をもたないわけではない。それと云ふのも、私のどこかにさういふ學問を好む性癖がひそんでゐたからでもあらう。ところがそれにも拘はらず、私がなぜ哲學を修めることにならなかつたかと云へば、そこに恐らくそれ以上に私を惹きつける方面があつたからに外ならないと考へられるのである。もちろん私はそれを最初からはつきりと自覺したわけでもなかつたが、それでゐて人間の

嗜好といふものはふしぎなもので、おのづから人々をその方向に向はせてしまふのである。私はそれにつけても、あのエネルギー原理の確立者として誰も知つてゐるヘルマン・フオン・ヘルムホルツが、彼自身の少年の頃を追憶して述べてゐる言葉を想ひ出さないわけにゆかないのである。彼の父親はその頃ギムナジウムで哲學を教へてゐたので、それと共に文學や詩を愛好してゐたから、その息子にもこれ等を修めさせようとしたのであつた。ヘルムホルツも決して之等の學問を好まないわけではなく、殊に「最初には詩について大きな驚異をもつてゐた」とも自分で言つてゐる。でも何時の間にかそれよりも多く、自然に心を惹かれるやうになつたと言ふのである。それも元來は數學を好むところから出發したのであつた。こゝに少しく彼の言を引用することを許して頂きたい。

「ところが、そこに存在する最も完全な記憶術的な補助手段は、現象の法則の知識である。これを私は最初に幾何學で學び知つた。私の幼ない頃に積木遊びを行つた際に、私は空間形式相互の關係が直觀によつてよく知られてゐた。規則正しい形の物體を相互に並べてどのやうにして適合させるかと云ふことなども、私はいろいろにそれらに向けてみて

さほど考へることもなく、よく知り盡してゐた。私が幾何學を正式に習ふやうになつたときに、私にはそれを學ばない以前に既にすべての事實がわかつてゐたので、教師は大いに驚いてゐた。私の想ひ起す限りでは、八歳の頃まで通學してゐたポツダムの國民學校で既にその事が時々現はれてゐた。私には併し科學の嚴格な方法が新たに感ぜられて、それを用ひて、他の範圍で私を阻止してゐた困難をも消失させ得るやうに思つた。」

「たゞ幾何學は一つのものを缺いてゐる。それは特に抽象的な空間形體を取り扱ふのであるが、私はそれよりも寧ろ完全な實在に對して大きな喜びをもつてゐた。だんだんに成長して、身體も健康になるに従つて、私は父親や學校友だちと一緒に私の故郷ポツダムの美しい郊外を歩きまはつて、自然に對する大きな愛を獲得した。そこへ私がギムナジウムで物理學の第一歩を學ぶやうになつたので、それが非常に強く私の心を捉へて、純粹な幾何學的な、且つ代數的な學課よりも遙かに興味を惹いた。こゝには豊富な且つ複雑な内容がこもつて居り、自然の偉大な力に充ちてゐて、しかもそれが概念的に解せられる法則で支配されてゐるとすることができるのであつた。特に私の心を惹きつけたのは、最初に

はまるでわからない自然を法則の論理的な形式によつて精神的に克服することができると云ふことであつた。そのうちに、おのづから自然現象の法則を知ると云ふことは、自然に關する威力を手にするところの魔法の鍵であるとも悟るやうになつた。このやうな思考のなかに私はいかにも、親しみを感じたことでもあつた。」

「私は父親の圖書室から物理学の教科書を見つけ出して來ては、喜びと非常な熱心とを以てそれに讀み耽つた。それはいかにも古めかしいものであつて、そこではまだフロジストンが幅を利かしてゐたし、ガルヴァニズムはヴォルタの電池以上に進んでゐなかつた。それでも私は青年の喜びをもつてその書物で讀み知つたすべての實驗を私たちの貧弱な手段を使ひながら眞似して見ようとした。私たちの母親の亞麻布製品に對する酸の作用などを根本的に學び知つたが、さうでなければさほどよくはわからなかつたのであつた。一層よく會得したのは眼鏡ガラスをもつ光學器械の構造で、之はボツツダムで探して來たのであつたが、そのほかに父親の小さな植物學用の虫眼鏡でも實驗した。その頃には私が使ふことのできる手段は限られてゐたから、私が實行しようとする實驗の形式が見つかるまでには、

幾度もその方法をやり變へなくてはならなかつた。私が白狀しなくてはならないことは、學校でシセロやヴィルギルが讀まれてゐた際に、私はそれらにひどく退屈を感じて、幾度かそつと机の下で望遠鏡を通る光線の路を計算したりしてゐた。そしてそのとき既に幾つかの光學上の法則を見つけ出したが、それらについては教科書に何も記してなかつたので、しかも私にとつては後に檢眼鏡をつくる際に大いに役立つたのであつた。」

「このやうにして私は學問研究の特別な方向に突き進むやうになり、それが後に私を運命づけ、また許された事状のもとに熱情を傾けて之に従事するやうにもなつたのであつた」

ヘルムホルツからの引用は、先づこれくらゐで切り上げておくが、これで見ても彼がいかに深く自然に心を惹かれて、その奥にひそんでゐる謎を解かうと思ひ立つたかといふことがよくわかる。實は私はこの文を數年前に讀んで、何かしら之に共感を覺えないわけにゆかないのであつた。私は自分で實驗を試みようと思つたことはさほどなかつたが、自然に關する物理学上の理論には少なからぬ興味をもつてゐた。それも私たちの時代にはかなりに進んで來てはゐたが、もちろん未知の世界の廣く深いことは言ふまでもないのである。

そして私にはやはり純粹な數學よりも具體的な自然の方が多大の興味を與へた。それがともかくも私を物理學に向けるやうにしたのであつた。

このやうなことをくどくどと記してゐたのでは、哲學への思慕といふ主題がどこかへ見失はれてしまふことになるが、それでゐて私にはまた多少とも哲學に近よる機會が與へられるやうにもなつたのであるから、人間の運命はふしぎであると言はなくてはなるまい。私は大學で物理學を修めてゐる際に、特にそれのたくさんの輝かしい理論について感激を禁じ得なかつたが、そのなかで何かしら最も多く心を惹かれてゐたのは、ルードウィッヒ・ボルツマンの仕事であつた。エントロピー法則に對する彼の統計力學的解説が物理學上での最も偉大な研究の一つに屬することは、こゝに擧げるまでもないであらうが、それ以外にボルツマンが物理學理論の根本やその他について説明した事ながら、「Populäre Schriften」として一巻の書物にまとめられてゐる。私はそれを讀んで、一層多く彼に傾倒したのであつた。そのなかには、「理論物理學の方法について」とか、「理論の意味について」とか、「物質的自然に於ける現象の客觀的存在に對する疑問について」とかの最も根本的

な考察を始めとして、種々の興味ある論説が載せられてゐる。もちろんそのほかに力學原理や統計力學に對する深い考察なども含まれてゐる。哲學的なものではショーペンハウアーを論じたのがあり、更に卷末には彼のカリブオルニアへの旅行をいかにもおもしろく記述した「一人のドイツ教授のエルドラドへの旅」といふのが收められてゐる。ともかくこの書物は私にはこの上なくおもしろいものでもあつたし、また、甚だ有益でもあつた。そして物理學理論の哲學に對する關係などについてもいろいろな示唆を與へられたのであつた。この外には、マツハの種々の著述や、之に關聯するブランクの論説などもかなりの影響を及ぼしてはゐた。つまり私は直接には哲學に向はなかつたが、物理學の理論を通じてそれに接するといふ多くの機縁をもつたのであつた。

ところで、私が大學に在學してゐる頃に、アインシュタインのあの有名な相對性理論の最初の論文が發表されたのであつた。それに續いて電氣力學に關する幾つかの論文も公けにされた。もちろんその頃には之等のものもさほど一般の注意を惹かなかつたので、殊に我が國などではそれらに關心をもつ人々も殆んどなかつたと云つてよいのであらう。私が

大學を卒へてから少し経つた頃に、私はこの理論に興味を感じて、物理學教室の談話會で電氣力學に關するアインシュタインの論文を紹介したところが、或る助教授などは、運動體の電氣力學についてはこれまでいろいろの説があつて、どれがよいかまだ確かにはわかつてゐないのだから、この説にしてもよほど疑つてみなくてはいけないと注意されたほどであつた。私にして見れば、そこには實にみごとな結果が引き出されてゐると感じたのであつたが一般がさういふ有様であつたから、それ以上何とも言ひ得なかつたのである。このアインシュタインの理論が學界で問題になり出したのは、一九〇八年にミンコフスキーが「空間及び時間」と題する有名な講演を行つてからであつて、そしてそれ以來急激にこの理論の重要性が學界に確認されるやうになつたのである。

大學院に在つて私はその頃相對性理論に基いて運動體内の光の現象について研究し、それに續いて幾つかの論文をまとめた。それから數年後、東北帝大の創設に際してそこに就職することとなり、翌年にはヨーロッパへ留學の旅に上り、二年間滞在したが、その間にスイスのチューリッヒで、一學期をアインシュタイン教授のもとで過ごしたのであつた。

相對性理論の上では、この頃萬有引力が重要な問題となつてゐたが、これはその後世界大戰が始まつた翌年、即ち一九一五年に同じくアインシュタインによつて満足な解決が得られたのであつた。私は大戰の始まる數箇月前に歸つて來たのであるが、大戰の勃發すると共に、ドイツからは學術雜誌も來なくなつてしまつたので、この原論文に接することのできたのは大戰の後であつた。ところが恰も一九一九年にイギリスの日食觀測隊が相對性理論で要求されたところの萬有引力の場に於ける光線屈曲の事實を日食觀測によつて實證し、その結果が同年末にイギリスで公表されるに及んで、アメリカの新聞がそれを書き立てたので、その後物理學がどんなものかをまるで知らない人たちが相對性理論を口にすやうになつてしまつた。もつともそれも幾らかは科學への關心を廣めるのに役立つたかも知れないが、もう少し深くそれに通ずるだけの素養を具へないでは、結局有耶無耶に終るより外はなかつたのである。併し一方では之を機として物理學と哲學との或る接近が實現したことは確かである。そして私たちにしても必らずしもそれに無關心ではあり得なかつたのであつた。

ところで、一部の哲學者のなかには、やはり物理学の理論への正しい理解を缺いてゐた結果として、またもう一つには恐らく従來の哲學への先入感に捉はれてゐた故でもあらうが、相対性理論への強烈な反對論をその間に捲き起したこともあつた。それは大體に於ては次のやうな論議に歸着するのであつた。相対性理論では時間や空間について論じて、之等の内容を物理現象の法則に基いて規定しようとするが、それは抑も思考の順序を誤つてゐると云ふのである。なぜと云へば、時間や空間の概念、従つてそれらの形式は、カントも明言してゐるやうに、既に先驗的に定められてゐなくてはならないものであるのに之等を経験的な現象から逆に定めようとするのは許容し難い事からであるとするのである。この論議は一應は尤ものやうに見えるのであつた。なぜなら、經驗を言ひ表はすのに、時間空間形式の先づ與へられてゐなくてはならないことだけは、恐らく確かであらうからである。併しながらこれらの形式の内容をいかに規定すべきかは、實はそれだけではまだ明らかでないのである。現にアインシュタインの最初の論文に於て、既にその場合に實在の物理現象に對する或る法則の缺くことのできないのを確實に示してゐた筈である。いづれ

にしても時間空間形式の内容をいかに規定すべきかと云ふことは、この形式が先驗的に必要であると云ふことと區別して考へなくてはいけないのである。しかもその内容の規定に際しては、自然現象を我々が合理的に理解し得るやうにすべきであるといふこと、そしてこれが我々の科學に於ける合目的性なるものを満足に達成せしめ得る最も重要な要件であるといふことを、正しく肯定しなくてはならないのである。このやうな點を明確に考へてゆくならば、上述のやうな相対性理論への批難はおのづから消失するばかりでなく、實にそれを超えてこの理論のいかにも重大な意味をもつことをさへ知悉することができるに違ひないのである。つまりこの點に於て相対性理論が單に物理学上の一つの理論としてのみでなく、寧ろ哲學的にも重要な意味をもつことが知られるのであらう。

ともかくもこのやうにして相対性理論は哲學に對しても或る影響を與へたにはちがひないのであつた。後にそれから謂はゆる宇宙論が展開し、更に力の場の單一理論が種々の形式で試みられるに及んで、それらの哲學的意味も一層の重要性をもつやうになつたのちがひないが、これ等については哲學者の側からは何の論議も提示されなかつた。

ところで、近代の物理学は、更に量子理論の進展に伴つて、そこに哲學的にも重要な問題を捲き起すこととなつた。それは周知の如く量子力学に於ける謂はゆる不確定性原理に由来する因果性の問題である。従来の物理学上の法則は殆んどすべて時間及び空間座標を獨立變數とする微分方程式で云ひあらはされて居り、従つて現象の過程が時間的に一定に規定せられてゐるので、この事を物理学上では一定の因果關係が存するとして言ひあらはしてゐたのであつた。ところが量子力学で取り扱ふ對象に就いては、之がもはや成り立たなくなつてしまつたので、こゝに因果律なるものが全く新たな意味をもつて考へられなくてはならないやうになつたのである。詳細な點まではこゝでは立ち入つてゐるわけにゆかないが、ともかくも之が哲學的にも極めて重要な事であることは確かである。更に量子力学では、この問題に關聯して謂はゆる假現問題を排除することの極めて重要であることを教へたのであつた。假現問題といふのは、現實的にはいかにしても觀測のできない事象を論議の問題とすることを指すのである。量子力学では、物質の要素的粒子、例へば電子の位置と速度とを同時に知らうとすることは、かやうな假現問題であるとせられてゐる。我々は從來

屢々徒らにこのやうな假現問題を、さうであることとなく取り上げて、無益な論争を行つてゐたこともかなりにあつたので、それが科學的には全く無意味であることが、こゝに明らかにされたのであつた。しかもそれは科學の上でばかりではなく、哲學的にも極めて重要な事であるのである。なぜなら、若しこの點が十分に深く考慮されるとするならば、哲學上で従來多くの論争が重ねられた種々の問題のなかにも、本質的には無意味な假現問題が必らずしも尠なくないとも見られ得るからである。古くから存在してゐた唯心論と唯物論との論争の如きも、蓋し之に屬するのであらう。

哲學と相關聯する物理学上の問題は、この外にもなほいろいろあり得るわけであるが、こゝではそれらを一々數へ立てることは止めておかう。いづれにしても私が哲學への關心を深くもつとすれば、それらを通じての思索が主となつてゐたので、こゝにはその主要なものを記してみたのである。哲學への思慕といふ題目から云へば、それは聊か傍き道へ外れてゐるやうでもあるが、併しこれらの事からは哲學それ自らにとつても決して見のがし得ない問題であるには違ひないのである。しかもそれらは物理学上の解決によつて始めて

その本質を明らかにし得るものであつて、この意味で兩者の密接な關聯を無視してはならないのであらう。

このやうな關聯について、私が最も深く感じてゐるのは時間の非可逆性の問題でもあるので、それをもう一つこゝに附記してこの文をきり上げることとしよう。時間の非可逆性といふことは、我々人間をはじめとして、あらゆる生物にとつては當然のことであり、それによつていつも過去と未來とが區別せられてゐるのである。ところが、それにも拘はらず多くの物理現象では時間の非可逆性のあらはれて來ない場合がかなり多いので、普通に力學でとり扱ふ運動などではさうであり、上に述べた相對性理論などでもこの意味で時間座標と空間座標とを同等に見なして四次元の時空世界を考へてゐるのである。そこでかやうな場合と、我々の現實の經驗とがなぜ異なるのかといふことは、單に物理學上のみでなく、哲學上でもそれは重要な問題であるにちがひないので、ところがこの問題も物理學的には始めて上にも擧げたボルツマンによつて解かれたのであり、それについて私にはやはり忘れ難い想ひ出があるのである。

それは私がまだ東京帝大に在學してゐた際に、二年生から三年生に進む頃には理論物理學の學生としては私一人しか居なかつたので、長岡教授のもとでのゼミナールには、いろいろな書物を読んで行つては、自分でその内容を述べるといふことになつてゐた。他に誰も質問するものもゐなかつたのであるから、それはすすんずと進んで、それだけにたくさん書物を読むこともできたのであつたが、そのなかにボルツマンの「氣體論」があつた。そして私はそこで始めて彼のすぐれた思索に感激したのもあつた。物理學を修めたものが誰でも知つてゐるやうに、ボルツマンは熱力學の第二法則を始めて統計力學的に導き出し、そしてこゝに時間の非可逆性を事象の確率と結びつけることに成功したのであつた。つまりそれ以前には熱力學の第二法則は單に經驗的に知られてゐたので、そこに謂はゆるエントロピーなる量が常に増大すると云ふことが述べられてゐたのであるが、ボルツマンによつてそれは即ち個々の要素的粒子が統計的に確率の大なる状態に向ふことを意味するのであると解せられ、實際にさうであるならば之が確率の小なる状態に向ふことも、たとへ極めて稀ではあつても決して絶無ではないとされたのである。この結果は哲學的にも甚

だ重要な意味をもつと云はなくてはならない。なぜなら、この時までには熱力学の第二法則に従つて宇宙は最後に死滅の状態に到達すると信ぜられてゐたのに、之が單に確率の大きな方向に向ふことに外ならないとするならば、それに反する事象も絶対に存在しないわけではないからである。現にボルツマンはこゝに宇宙の生成の過程を見ようとしたのであり、十分に長い年月の間に、例へば 10^{10} 年の間に一度ぐらゐはエントロピーの減少する世界が實現し得るであらうとも考へたのであつた。しかもこのやうな世界のなかに若し生物が存在するならば、この生物は同じくエントロピーの増大する時間の向きを未來として判断するのであらうとも言つてゐる。このことは、つまり時間の非可逆性に對する最も本質的な解義でなければならぬのであらう。この問題に關しては、現時の量子論からはなほ多少とも異なる見解を必要とするやうにも見えるが、そこには更に未解決の種々の問題もあるので、之は今後の理論的發展を待たなくてはならないのであり、こゝではともかくもボルツマンの理論に對する私の切實な想ひ出を記すに止めておかう。

哲學への思慕と云つても、要するに私の場合にはかやうな物理学の理論を通じての關聯

に外ならないのであるが、併しさうであるからと云つて多くの偉大な哲學者たちの言説を私は決して有益でないとは考へないし、また實際にそれらからの種々の影響をうけてゐることも確かであると思つてゐる。たゞ自然科学者の立場からは、それらに對してもできる限り客觀的に接してその長所を探ることは重要なのであり、この意味で學問の根原としての哲學を認識する上に於ても多少の相違はあるかも知れない。

(昭和十六年七月)

ヨーロッパ留學當時の思ひ出

ヨーロッパに私が留學したのは、前世界大戦前のことであるから、もう今からは三十年ほど前であり、今さらにかにも遠い昔のやうに感ぜられる。それだけにいろいろな記憶の確かでない點もあるわけであるが、ともかくも思ひ出すまゝに記してみることにする。

日本を出發したのは、明治四十五年の三月末であつた。その前年に、仙臺に東北帝國大學が設けられて、理學部の授業も始められてゐたので、私の出發も三月までの學期を終つてからでなければならなかつたし、それでゐて留學するとなると、あちらで四月半頃から始まる夏學期に間に合ふやうにもしたかつたので、シベリヤ經由で大急ぎにドイツにゆく

ことにしたのであつた。その頃にはシベリヤを直行する國際列車に乗るのには、敦賀からウラヂオストックに渡らなくてはならなかつた。この航海では、船も小さかつたので、ひどく揺られて閉口した。併しともかくウラヂオストックに上陸して、そこから眞つ直ぐにドイツのベルリンに向つた。尤もその間モスクワの大使館に友人が居つたので、一日をそこで費してモスクワ見物を行つた。ところがそのおかげでそこから先きは國際列車でなく、ロシヤの普通列車に乗らなくてはならなくなり、そこでいくらかの失敗めいた話もないではなかつた。こゝではそのやうなことは省いておく。ともかくそれからベルリンに着いて、そこで數日滞在した上で南ドイツのミュンヘンに向つた。

その當時ミュンヘンの大學には、理論物理學者として名聲の高いゾンマフェルト教授が居られたので、私はその許で研究を行ふつもりで、そこに赴いたのであつた。實驗物理學の教室には、エツキス線の發見で、それこそ世界で誰知らぬものもないレンチェン教授が居られたが、理論物理學の教室はそれとは別に離れてゐた。ゾンマフェルト教授の外には員外教授としてラウエ博士が居り、そのほか若い澁刺たる研究者もたくさんにゐて、なか

なか賑やかであつた。

さてミュンヘンに着いたところで、何と云つても外國での生活は最初のことでもあつたし、土地の様子もまるでわからないのであるから、萬事を誰かに世話してもらはなくてはならないのであつたが、幸ひにそこには同じく物理学を専攻して居られた木下正雄君が以前から滞在して居られたので、假寓のことやら大學のことやら一切を骨折つてもらつた。尤も木下君は工業大學の方で研究に従事して居られたので、大學の教室とは關係がなかつたがそれでもいろいろな話を聞いて大いに便宜を得たにはちがひなかつた。假寓には、商科の藤本幸太郎君が同じ家に宿泊して居られたので、これも大いに都合がよかつた。ミュンヘン滞在中にはよく藤本君と伴れ立つて近郊に出かけたり、諸處の見物などをもしたことがあつた。

大學に入學の手續をすましてから私は早速にゾンマフェルト教授をその教室に訪ねた。それまでに私は相対性理論や量子論に關するいくつかの論文を日本の學會や大學の學術雜誌に載せてゐたので、それらの別刷をそのとき教授に進呈した。この外にその頃ドイツ

のアーヘン大學に居られたシュタルク教授の主宰せる放射能及び電子學年報に相対性理論に關する綜合報告を一、二箇月前に載せたこともあつたので、ゾンマフェルト教授は私の名を見てそれをも想ひ起されたのであらう。ともかくそれらの論文を一瞥した上で「大學の講義は一般的なものだからそれに出席するには及ぶまい。それよりも自分で研究をやつてゆくがよい」と云ふ意味のことを述べられた。併し私はドイツの大學の有様もいろいろ知りたいから講義も聞きたいといふことを答へると、「なるほど、それもよからう」と、言つて微笑された。

このやうにして私は大學の講義を聞くと共に、毎週一回づゝ教授の自室を訪ねて教を乞ふことにしたのであつた。ドイツの大學では最初の一般的な講義のほかの多少とも特殊なものは、學生自身が自由にその中の或るものを選択して聞いてよいことになつてゐる。それで私も三、四科目の講義を選んで聞くことにした。その中でゾンマフェルト教授の講義は、いかにも明晰でわかりよく、ドイツ語を耳にすることにはまだ不慣れであつた私などにもよく理解できた。それとは反對に、ラウエ員外教授の言葉は何かの訛りのせむか、ど

うもはつきり聞きとり難くて、これには大いに閉口した。たゞ内容は大體わかつてゐたから、それから想察してゆくのがせいぜいであつた。これらの講義に同席してゐた連中のなかにヘルツフェルトやエプシュタインなどといふ人々があつたが、後にそれらの人たちの論文を眼にする毎に、私はその當時を想ひ出すのであつた。

ゾンマフェルト教授の許に通つて、二度目頃のことであつた。教授は、これはまだ正式に發表されてゐない事があるがと言つて、ラウエ博士のエックス線干渉の實驗のことを話され謂はゆるラウエ斑點の寫眞を示されて、これこそすばらしい結果であると激賞されてゐた。私もそれには異常な興味を寄せたが、この頃にはまだ量子の本質が一向にわからなかつたので、教授などの考へでは、量子といふものは原子機構によつて現はれるものであつて、それ自身獨自の存在ではないとせられてゐたのである。それで量子に關するいろいろな問題を私にも與へられたのであつたが、私としては量子を獨自的存在と見做したかつたし、それで之に對して確率論を應用して一つの論文をまとめた。教授はそれを讀んで、これも一種の考へかたではあるがと言ひながら、やはりそれを受け容れることにやゝ

躊躇されて、之は日本の學會の雑誌に載せたらよからうと勧められた。この事は當時としては無理もない事であつたと私は思つてゐる。この論文は私もついその儘にしてしまつたが、後の経過を見ると、これもどこかに發表しておけばよかつたと思はれるのであつた。それはいろいろな方向に於ける學問の展開を示す一端ともなつたかも知れないからである。

ミュンヘンには、このやうにして夏學期の終るまで滞在してゐたが、その間にいつもゾンマフェルト教授に親しく接して、印象を深めたことでもあつた。そして別れの挨拶をかはしたときなど、何かしら涙ぐましい感さへあつた。そのとき何れはアインシュタイン教授の許にゆくつもりで紹介狀を書いて頂きたいと言つたら「そんなものは要るまい、殊にあのやうな人には」と言はれたので、私もそのままにしてしまつた。すべては遠い日のなつかしい思ひ出である。

ミュンヘンを出發してから私は西ドイツを旅してベルリンへ向つた。先づミュンヘンの近くにあるニュルンベルグの古都を見物した上で、ヴュルツブルグに行つたが、その大

學の物理學教室の外壁に「一八九五年ウィルヘルム・コンラート・レンチエンが彼の名で稱へられる放射線を此處で發見した」といふ文字が記されてゐるのを見て、私は異常な感激を覺えないわけにゆかなかつた。恐らくこの文字はこゝを通行する誰の眼にも觸れるにちがひないし、その度ごとに一人の偉大な科學者としてのレンチエンの名がその腦裡に深く印象されるのである。しかもかくてこそすべての人が科學への關心を如實にもつことができるのである。之と同じやうに、ゲッティンゲンでは、ガウス及びヴェーバーの銅像が人々の眼を惹いてゐることなどを想ふならば、さすがに科學の先進國を羨まないわけにゆかないのである。

ヴュルツブルクから更に西に向つて、私はハイデルベルグの古城を訪ね、そこからラインの流れに沿つてボン、ケルンを経て、遠く東の方に、ベルリンに辿り着いたのであつた。そこでベルリンには、それから翌年の三月迄滞在して冬學期を大學に通ふことにしたのであつたが、こゝではさほど特別な事からはなかつた。もちろんその頃ベルリンの大學には、理論物理學に世界に名だかいブランク教授が居り、實驗物理學にはルーベンス教授があ

つて多くの學生を集めてゐたし、また有能な若い人々もたくさんにそろつてゐたのであつたが、私は特別に親しみを感じた人がそれほど居なかつたと云ふわけである。併しその間に、私に非常に深い感銘を興へたのは、毎週一回づゝ教室内に開かれるコロキユムの有様であつた。コロキユムといふのは、日本では談話會と稱して、やはりそれと同じ事を行つてはゐるが、ベルリンでのコロキユムは非常に活氣に充ちてゐる點で、いかにも愉快な會合であつた。大體は順次に順番を定めておいて、その人が最近に發表された重要な論文を紹介すると、皆がそれについて議論し合ふのであるが、さういふ議論になると、そこに集まつた人たちが熱心に眞摯に論じ合つて、大家の説であるからと云つても、一步も譲るやうなことはない。こゝに眞理を追究するといふ熱情の溢れがほとばしつて、いかにも愉快である。このコロキユムは、圖書室で行はれ、教室の人々はすべて之に列席したが、私もそこに出るのが楽しみの一つになつた。そしてこのやうなコロキユムが、どうも日本ではさほど活氣よく行はれてゐないのを、これと見比べていつも遺憾に感じないわけにゆかなかつた。

ベルリンの生活をうたつたいろいろな歌のなかに、私はこのコロキウムについて次の數首を見いだすことのできるのも、私の忘れ難い思ひ出である。

白きひげ ふさふさとせるは われも名を聞ける人なり ゆかしげに識りぬ

學者の 會に我が來て 強くみてる 空氣の壓を 感ずるもよし

冬の夜を 空氣の張れる 室にみちて 理學論ずる あまたの人かも

或るときは 我が疑へる 學説を よしと思ふ人も 多くゐにけり

ベルリンには、いろいろな知人も多く滞在してゐて、時々それらの人々と出遇ふこともできたし、外國での生活にも殆ど慣れてしまつたので、その間に自分の研究をひたすら進めることもまた楽しみの一つであつた。たゞ北國の自然は陰うつな曇りがちの冬空をつづけて、妙に沈んだ情調を示してゐたので、それがどこか心を暗くするのも止むを得なかつたのである。

ベルリンで冬學期を終へてから、三月の末に旅行に出て、先づドレスデンを見物し、そ

れからオーストリアのヴィーンを経て、イタリアのヴェネチア、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ミラノなどをめぐり、その上でスウイスのチューリッヒに向つた。イタリアでは小出満二君と同行し、名だかいたくさんの古蹟に接しながら深い印象をとどめたことでもあつたが、それらについてはこゝではやはり省いておく。チューリッヒに着いたのは、もう春のほかほかと暖かい日であつた。

スウイスといふ國はいかにも景勝の地であることは誰も知つてゐる通りであるが、チューリッヒの町にしてもやはりさうである。市街はチューリッヒ湖畔にあつて、その東の方にはチューリッヒ山が立つて居り、その山腹の高い處まで住宅街が続いてゐる。登山鐵道で中腹まで登ると、遠くにチューリッヒ湖が望まれ、その後ろにはアルプスの山々が聯立してゐるのが見える。ともかくもそれはすばらしい景觀であると云つてよいであらう。私はその見晴らしのよい場處に假寓をもとめることができたので、チューリッヒでの春から夏までの生活は、いかにも快いものであつた。

それにもう一つには、こゝで私がかねてから私淑してゐたアインシュタイン教授に親し

く接することのできたのもチェーリッヒでの幾月をこの上なく明るくするに足りたのであつた。もちろん私がこの地に來ようとしたのも、その目的に依るのではあつたが、併し實際にその場に當面してみれば感激の一層深いのも當然であるに違ひない。但しこゝでちよつと説明を加へておくならば、この當時には、まだ一般相対性理論は出來上つてゐなかつたので、従つてアインシュタイン教授の名も普通の世間にはまるで知られてはゐなかつたのである。學界にしても、この頃は既に特殊相対性理論だけは確認せられてゐたものの、それもずつと以前には問題視せられてゐたのであるから、今から顧みると夢のやうにも思はれる。現に私が日本で大學を出た頃のことであつたと記憶するが、談話會でアインシュタイン教授の論文を紹介したところが、或る助教が運動體の電氣力學についてはいろいろな考へかたがあるからその説もどうかわからぬと言つて簡單にかたづけさほど問題にされない有様であつた。でも、私はこの相対性理論に異常な興味を覺えて、その後いくつかの論文をもまとめたのであつた。私の留學當時には、もうそんなこともなかつたのであるが、世間的にさほど知られてゐなかつたのは確かである。併し私にとつてだけはそれが

異常に重要な意味をもつてゐたことは、これだけの説明でもわかるにちがひない。

アインシュタイン教授は、そのときチェーリッヒの工業大學の物理學教授であつた。スウイスでは、大學は州立であつて規模も小さいのに反し、工業大學、即ちテヒニツシェ・ホッホシューレは國立で立派な設備をもつてゐた。アインシュタイン教授の外には、磁氣の研究で名高かつたヴァイス教授なども居られた。ともかくもさういふ行きがかりで、私はこのチェーリッヒに來たのであつたが、縁は不思議なもので、ちやうどラウエ博士がミューンヘンからチェーリッヒの大學教授に轉任して、やはりこゝで再會することになつたのであるから、私も一層なつかしい感じに浸つたのであつた。このほかに私がチェーリッヒで忘れ得ないのは、その後一箇月ほど經つてからであつたと思ふが、オランダのライデン大學教授であつたエーレンフェスト夫妻がこゝに來られ、またそれと時を同じくしてフィンランドのノルドストレーム博士も會合されたことであつた。このノルドストレーム博士とは、親しく論文を交換したりして以前から能く知り合つてゐただけに、初對面ながらも心おきなく話すことができた。相対性理論の上では當時萬有引力(重力)の問題を中心にし

て、種々の議論が行はれてゐた際でもあり、これらの人々はいづれもそれについて頭を悩ましてゐたことでもあつたので、或るときノルドストレーム博士が「引力論者たちが引力のおかげでみんなこゝに寄り集まつた」といふ意味の諧謔をとばして我々を笑はせたこともあつた。生真面目な學者の會合にも、時には一層無邪氣な笑ひに興する一面のあることが、こんな場合に現はれて來るのである。

それにしても私は、最初にアインシュタイン教授に面接したときの大きなよろこびと敬虔な感情とを、恐らく適切には言ひあらはし得ないであらう。その感激を想ひ出してみて私は後に次のやうな歌をまとめて見たのでもあつた。

名に慕へる 相對論の 創始者に われいま見ゆる こゝろうれしみ
われの手を ひたすらにとりて もの言へる 偉いなるひとを まのあたり見る
世を絶えて あり得ぬひとにいま逢ひて うれしき思ひ 湧くもひたすら
うれしめば 教室のなか 明かりき 偉いなるひとに わが對ふいま

まろき眼は ひかりてありぬ その瞳 我れに向きつゝ 和みたりしか
厚みたる くちにも言ひ あたゝかみ 溢るゝがごとき 情こころしたしも
部屋のなか 空氣ふるひて 流れたりぬ わがあふぐひとの 息にいるべく
偉いなる ひとを我がみぬ うちひそみ 黙居るにいや 面したはしく

この工業大學や州立大學はいづれもチューリッヒ山のかなり高い處にあつて、あたりの眺めもよかつたし、その邊りには天文臺街や物理街などと呼ぶ靜かな並木道などもあつていかにもゆかしい場處であつた。工業大學の建物ははでな赤い色のどつしりとしたものであつたが、その正面の南向きの二階にアインシュタイン教授の部屋があつた。光線がよくはひるこの明るい部屋のなかで教授はいつも深い思索に耽つてゐた。大きな卓机のうへには雑然としてたくさん書籍が置かれてゐた。そこで私はいつも科學上のいろ／＼な問題についてその教へを受けたのであつたが、さういふ場合には、いかにも隔てのない氣持で親切な話し相手といふ感を懷かせられた。

工業大學の表側には、山の上へ登つてゆく廣い並木道が斜めについてゐたが、その邊りには家もないので、見晴らしのよい公園のやうな趣きがあつた。晝休みどきやその後の時間には、よくこの道をゆつくりと歩みながら書物を手にして讀んでゐられる教授の姿を私は見つけたのであつた。カスターニーの廣い葉が春のうら暖かい光りを浴びて輝いてゐたが、むざうさに部屋から出て來られた教授は帽子もかぶらずにそこを歩き來せられるのであつた。或るときにはひよつくり私と出遇つて、いきなり「輻射はやつぱり量子的な關係に支配されてゐるよ」と言ひ出された。前にも言つたやうに、輻射の問題が當時研究の一つの中心ともなつてゐたからである。それからひよつくり言葉をかへて、「チューリッヒの空は美しいではないか」と、春の光りのうごいてゆく天空を見上げられるのもあつた。チューリッヒは教授の第二の故郷とも見らるべき場處であつたが、教授は深くその自然を愛してそこにはるかな理想をこもらしめても居られるやうであつた。私はそのゆたかな平和な瞳子を想ひ出して、ひとしほのなつかしさに打たれないわけにゆかないのである。

それからこゝでも水曜日之夜には、定つてコロキウムが開かれ、皆がさかんに議論を

かはした。そしてそれが終ると、お互ひに相連れ立つて山をくだり、チューリッヒ湖畔のカフェーに集まつて、そこでまためいめいの意見を述べながら、遠慮のない議論をくり返すのであつた。論じ疲れると、いつももう遅い夜道を三々五五相分れて、めいめいの家路に歸つてゆくのであつたが、これも實に學者らしい、しかもまことに楽しい會合であつたことが、しみじみと感ぜられる。

夜の會 終ふる時刻頃を 學者らの むれぞよめけり 教室のまへ

カスターニーの 並樹まぶかき 夜のみち 人はたからかに かたりてゆくも

街燈の ひかり流らふ 舗道を 黒き帽子の ひとら並みゆく

學者らの むれともしけれや 山腹を くだりていゆく ひかれる街に

街なかの カフェーの庭に 夜おそく 語り疲れて おもゑひにけり

銀のごとく 霧しろくくたる この夜を ともしみて山に 歸りゆくなり

このやうな歌を通じて、私はその當時を如實に追憶することができる。

スイスといふ國には、東の方ではドイツ語を話す人々が住んで居り、西の方はフランス語、南はイタリア語と云ふやうになつて居り、そのほかに他國の人たちがたくさん入り込んでゐるだけに、元來が國際的であつて、従つて我々のやうな東洋人が行つたにしても、少しも外國人扱ひをしないので、それだけでも氣もちがよい。大學の教授や學生にしても、却つてスイス生れの人々は少數であると云ふほどの有様であるし、私の住んでゐた下宿などにも殆ど他國人ばかりが集まつてゐた。それが却つて親しみを増すことにもなり、食堂に集まると、國々のいろいろな珍らしい話に興じ合つた。ポーランドから來てゐた女學生など、殊に東洋に多くの興味をもつてゐて、漢字をおもしろがつて、その書きかたを教へてくれと私に言ひ出したこともあつた。ロシアから亡命して來てゐる人々などもあり、そのなかで醫學を學んでゐるといふ或る女からは、さまざまのものをかなしい嘆きのこゝろを聞いた。今はこの人の良人になつてゐるドイツの若い青年は、たしか動物學を専攻してゐたが、それでゐて相對性理論などにも多大の興味を寄せてゐたので、私ともそれに

ついでよく話し合つた。そしてそれに關する論文を書く場合に、この人にドイツ語の文章をなほしてもらふこともできたので、これは大いに私のためにもなつた。別に物理學について學んだわけでもないのに、なかなかよくその内容に通じてゐることに關しては、私は少なからず感心しないわけにゆかなかつたのである。つまりはこれもドイツに於ける科學普及の一端を示す恰好な例とも見られるであらう。

いづれにしても、チューリッヒの數箇月はいかにも想ひ出のふかいなつかしい日々であつた。その美しい自然と暖かい人情とが私をつんでくれたからである。

くさ原に ひかりやはらぎ あたたけし 牛のはらばひ これか 噂むをみる

限りなく ひろき郊外の 林檎園に 花しろき日を いたく愛でにけり

山腹の 街をしゆけり 緒いろに 煉瓦の家の ならびゐる街

しづかさの 深き晝なれ はいどいの 花匂ひよどむ 山腹の街

緯度たかき くにに我が住めば 天づたふ 日のくれおそき 空をあやしむ

僑住の いち日をながき 思ひして けふも論稿に わが親しめり
白き札に 天文街と かきてある 山腹のみち まろく曲れり
落葉しく 天文街のくだりみち 遠くひらきて 低空のみゆ

アインシュタイン教授からは、この間にいろいろな教へをうけたことでもあつたが、それらの内容は餘りに専門にわたることでもあるから、こゝには記さない。ともかくもこゝで夏学期を終つてから、教授との別れを惜んで、私は再びイギリスへの旅に出たのであつた。尤もその間に田丸節郎君とアルプスの山のなかの人里離れた静かな場處で一箇月ばかりを過ごし、それから十月の始めにイギリスへ渡つたのであつたが、その後ロンドンで冬を過ごし翌年の三月にはフランスのバリに來てまた一箇月餘を費し、その上でベルリンに戻つてみると、ちやうどアインシュタイン教授もカイザー・ウイヘルム協會所屬の物理學研究所長となつてベルリンの郊外のダーレムに來て居られたので、そこで再會の機を得たのであつた。これもまた奇遇の一つであつたわけである。

ダーレムの物理學研究所に對立して物理化學研究所があるが、そこには空中窒素固定法の發明者として名だかいハーバー博士が居られ、その下で田丸節郎君が研究の上でもさかんに活躍して居られたのであつた。それで私はベルリンに戻ると、早速に田丸君をそこに訪ねて、ハーバー博士にも面接、またアインシュタイン教授にも再會することができたのであつた。田丸君からいろいろそこの研究の有様を聞き知ることができたのも、私には大いに有益であつた。

さて その年の五月にベルリンを出發して、再びシベリヤを通過して私は日本に歸つて來たのであつたが、やがて八月になると、大戰が勃發し、爾後數年間はドイツで親しく接した諸大家の消息さへも一向に知ることができなかつた。ドイツの學術雜誌もどうなつてゐるかわからなかつたが、その間も絶えず出て居り、殊にアインシュタイン教授の一般相對性理論やゾンマフェルト教授の量子論的原子構造論などが發表されて居たのを知つたのは大戰が終つてから後のことであつた。私もその頃これらの研究を志してはゐたが、共に論じ合ふ人々を缺いてゐたことは、ともかくも遺憾の至りであつたにちがひない。學問の研

究にはぜひともさうした師友を必要とすることを、私はいつもこの場合の事情を考へ合はせて痛感するのであつた。

世界大戦の終つた翌年、即ち大正八年にはイギリスの天文観測隊が南米及びアフリカに出かけて、日食観測をなし、その際に一般相対性理論によつて豫言された光線屈曲の事實を寫眞によつて確めることに成功したので、この結果がその年の末にイギリスで發表されると共に、アインシュタイン教授の名聲は俄かに世間にまで擴まり、物理學の理論のどんなものかをまるで知らない連中までも頻りに騒ぎ出したことであつた。それに伴つて教授は諸國からの招聘に忙殺されるやうになつたが、一々それに應じてゐては研究の妨げになるといふので、僅かにアメリカとイギリスに赴かれただけであつたといふことであつた。

ところが我が國でも改造社の社長の山本氏が京都大學の西田幾多郎博士の懇意によつてアインシュタイン教授を招聘しようといふ計畫を立て、私にもそれを相談されたので、若しそれが實現出来るならば我が國に科學を普及させるためにも大いに効果があるに違ひないと考へて、私も直ちにそれに賛意を表した。しかもこの事がやがて大正十一年の末に實現

されたのであるから、これはそこに實にアインシュタイン教授の東洋に對する特殊な興味が動いてゐたからに外ならないとは云へ、私には三度教授に遇ふことのできる絶好の機会ともなつたのであつた。同年五月に受けとつた教授の書信の終りには「あなたと此の秋にお目にかゝること、そして私たちにとつてはお伽噺の幔幕で包まれてゐる輝かしいあなたの國を知ることよろこばしくもくろみながら」といふやうな懐かしい文句さへ記されてあつた。

かくて同年十一月の十七日に教授は神戸に安着されて、それから十二月の二十九日に門司を出發して歸途に就かれるまで、約四十二日間を我が國に滞在せられ、その間、東京、仙臺、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡の各地で講演を行ひ、またその暇々には諸處の風光に接せられ、更に古代建築や能樂やその他の日本固有の藝術を深く鑑賞されたことであつたが、それらに就ての幾らかの記述を私は既に「アインシュタイン教授講演録」(大正十二年改造社刊行)のなかに載せたので、こゝでは省いておく。なほ同書のなかには教授が東京から名古屋に向ふ汽車のなかで自ら筆をとつて記された「日本感想記」も收めてあ

る。そのなかで教授は先づ日本に於ける家族制度の美點を擧げて、次いでその藝術の特質を嘆稱してゐられる。「實際にこの國に由來するすべてのものは愛らしく朗らかであり抽象的形而上學的ではなく、いつも自然を通じて與へられたものとかなり密接に結びついてゐます」と言ひ、日本の家屋の有様や、そのなかでの起居を叙して、「あらゆる事がら、それは只驚異に値ひしますが、併し眞似することはできません」とも述べられてゐる。次いで日本音楽に言及し、それは「私には思ひがけない直接の印象をもつ一種の抒情畫として見えます」と云ひ、「それは人間の聲音並びに自然の響音、ちやうど鳥の歌ひ囀りまたは海洋の波の響きのやうに人間の心に或る感情を喚び起すやうなそれらの響音の感情表現を書きあらはしたもののやうであります」とも記してある。繪畫及び木彫に關しては、「日本人が形體に歡喜する眼の人間であつて、出來事を倦まずに藝術的に描出し、書かれた線に變へることがこれで判る」となし「鮮明と單純な線とを彼は何よりも好愛します」と言つてもゐられる。そして最後に、「西洋以前にもとからもつてゐた大きな財寶、即ち生活の藝術化、個人的欲求に於ける質朴さと簡素さ、そしてまた日本の精神の純粹さと平

靜さそれらをすべて純粹に保存することをどうぞ忘れて下さるな」と結んで居られる。「この國ほど私達にとつて神祕の覆ひで包まれてゐるものは外にどこにもない」とせられる土地の風情や藝術に對して僅かの時日の見聞によつてこれだけの理解を得られたと云ふのも教授が元來科學のみではなく、藝術をも深く愛好せられてゐるからに外ならないのである。現に教授がヴァイオリンの名手であることは有名でもあり、我が國に來られた際にも帝國ホテルの歡迎會席上で之を奏せられ、また名古屋でも醫科大學のミハエリス教授と共に合奏されたのであつた。その際教授夫人は、「私の夫は物理學者にならないで音樂家になつてもきつと成功したにちがひない」と云はれ、「あれが餘りうますぎるので、自分はそれ以來樂器を手にするのを止めました」とも微笑されたのであつた。教授に親しく接しておのづから感ぜられる溫情はこのやうな藝術愛好の心にもよるのであらう。さう云へばその風貌にもいかにも藝術的なおもかけが偲ばれるのであつた。それにしても自分の使命が科學の研究にあると信ぜられてゐる教授は、旅行中の汽車のなかや、食後の僅かの暇を見ては、私にその際の研究問題をいつも話されながら、紙片を

取り出しては之に關する數式などを記されるのであつた。それは主として電磁的エネルギー・テンソルの對稱性の問題に關するものであつたが、私もそれについて幾らかの計算を手傳つた。「科學の問題を解くには、單なる想像ではいけない」「神は想像をもつてではなく、いつも理性をもつて仕事する」とも言はれてゐた。

私には併し教授のこの折の言葉で、現に一層の深い感慨をもつて想ひ起されるものがある。それは或るとき私に向つて「アメリカに行つたことがあるか」と問はれたのに對して、私はアメリカを知らないと答へると、「あんな國にゆくものでは決してない。あそこはすべて金錢ばかりの一次元の世界だから」と言はれたのであつたが、それから二十一年後の今日に於ては、教授は寧ろ異常な満足をもつてその國で研究を續けて居られることを想ふと、人生はまことに測り難い運命に導かれてゆくことを、しみじみと感じないわけにゆかない。恐らく現在とても教授はそこで科學の研究に精進し、そしてまた音楽にも親しむことによつて、自らの満足を感じて居られるに違ひないと思ふが、更に一面からはそこに數奇の運命の見舞つたことも事實であつたのである。私は今さらに初めて 스위ス

で出遇つた頃のそのおもかげをも心に思ひ浮べながら、限りない感想に耽らないわけにゆかないのである。

とりとめもない筆先きで、私は留學當時の思ひ出と、それに引き續くその後の事からこゝに記して來たが、そのなかで強く印象されてゐるゾンマフェルト教授やアインシュタイン教授などは、ともかくも私の物理學上での恩師として最も親密な關係にあつたのであるし、それが他國の人たちであるだけに私にはそこに特殊な感情も湧き出るのである。私の筆はそれを十分に言ひあらはすことさへもできない氣がするのであるが、こゝにもう一つアインシュタイン教授が我が國に來られた日に、私の綴つた詩句のなかからその數節を抜き出して、この文を終ることとした。

或るひとりの偉大なる科學者、

彼の頭髮はもやもやと波うつて、

歐洲人の特徴を帯びた

褐色の寂びをもつてゐます。

そして額の生えぎはに

うすじろい幾條の線を見せて

叡智のおもかげを偲ばせてゐる。

しかも彼の額と双頬とは

情愛のふくよかな柔かみを湛へ、

彼の兩眼は

藝術家らしいゆたかな潤ひと輝きとに充ちてゐます。

あゝ、その靜かな溫容、

私たちの憧憬は

既にそこに惹かれてゆくのです。

冬ちかい日の

ある汽車の展望車のなかで、

私はその横顔をじつと見守つてゐた。

窓のうしろの明るい空が

この穩かな顔貌に

光つた輪廓を興へてゐます。

.....

彼の口から話される外國語も

さながらにうつくしい絃の響きのやうに、

私たちの共感を起さすにはゐないのです。

そして私たちみんなのこゝろが

おのづから親しさに

吸ひこまれてゆくのでした。

○

しろい粗刻みの石材が

あちらこちらに露はに出てゐる

ホテルの長い廊下を歩んで、

彼の部屋の扉をあけると、

「さあ、おはひりなさい

こんどこそあなたがさきへ。

こゝは私のうちですから」と、

無理に私を押し入れて

椅子へかけさせながら、

刻み煙草を探すのでした。

くはへ煙草でゆつたりと、

けむりをくゆらせながら、

おほくの疲れを忘れたやうに

「私の自由な時間が

いまやうやく私に來ました。

さあ、ゆつくり話ませう。」

煙草のけふりは

電燈の光りにてらされます。

○

象のやうな笑ひと

ある人は云ひました。

自然のおほ空のなかに

どことも知れぬ風が奏する

おのづからな音楽のやうに、

また嬉々とした子どもらの

純心から生れ出るもののやうに、
彼の眼と頬とからは
笑ひが湧きました。
そこにはうつくしい
直観の世界が見られます。

完璧な多次元の世界は
それに相應したいろいろな
断面を示してくれます。
そしてそこには、めいめいの
謂和が具はつてさへゐます。
やはらかい雰圍氣と
淡い匂ひと味ひとを

おのづから漂はせて、
ひとつのたかい生命は
私たちに
調和の世界を髣髴させます。
敬愛する偉人よ。
私はあなたのやうな人間が
衆くのなかに選ばれて
あの偉大なる科學理論の創設者であり得たことを
ひとつの意味ぶかい偶然として
感謝しなければなりません。
私たちの純眞な科學のために、
そしてまた、殊さらに
私たちすべての人間のために。

「哲學しようと 思ふ人は

自由の精神をもたねばならぬ。」

あの廣大な天と地と、そして人間精神と、それらの一切のものが宗教的迷妄に閉ざされ、徒らに一つの中世紀的信仰形式に囚はれてゐた時代に、我々の自由な精神の叫びは種々の方面に高揚せずにはゐなかつた。最も直接にはマルティン・ルーター(1483—1546)の熱烈な宗教改革運動となり、又ジョルダノ・ブルノー(1547—1600)の過激な教理及反駁を結果したことは恐らく誰も知つてゐるであらう。これと同時に思辯的な古代ギリシヤの

哲學はそれ自身に於て反省を餘儀なくされた。そしてフランシス・ベーコン(1561—1626)や、ミシェル・ド・モンターニュ(1533—1592)の新たに提唱した哲學を経て、遂に近世の批判哲學の基礎を築くに至つたデカルト(1596—1650)のそれに達した。しかもこの間に我々の最も注目すべきことは、我々に永遠の眞理を教へるところの自然科学が始めてその確實な歩みを地上に印しづけるに至つたことである。我々は先づそこにレオナルド・ダ・ヴィンチ(1453—1519)の優れた卓見を想ひ、ニコラウス・コペルニクス(1473—1543)の驚くべき學説を眺め、そして更に之等の眞髓をその手に捉んで、我々に最初の科學的建造物の規範を示してくれたガリレオ・ガリレイ(1564—1642)の偉大な業績を見出すことができる。人間の眞に大きな自由の精神はかやうにしてその成育を續けたのであつた。

かくて漸く呱呱の聲を上げた自然科学に對して、立派な成人的面目を與へるに至つた功勞者として、我々は有名なアイザック・ニュートン(1642—1727)の名を擧げなければならぬ。併しニュートンをしてその大事業を成し遂げしめるためには、之に必要なだけの

階段がそれ以前に踏み登られなければならなかつたことは確かである。誰がこの役目を果たしたかと云ふことは、ニュートンの遺業を讚美すると共に我々の忘れてならない處であらうと思ふ。私はこの人物として次の二人を擧げることが最も當然であると信ずる。その一人は即ちガリレオ・ガリレイであり、もう一人はこゝに語らうとするヨハンネス・ケプラーである。

能く知られてゐるやうに、ニュートンの業績のうちの最大のもは力學原理即ち運動の法則の確立と萬有引力の發見とであるが、前者はガリレイに於て既にその基礎が或る程度まで築かれてゐたのであつたし、後者はケプラーが多くの苦心を費して探究した惑星運動の法則に基いてなされたのであつた。従つてガリレイ及びケプラーなしには、ニュートンの業績も亦その一人の手によつては完成されなかつたのであらう。我々が科學思想の發展を追究するに當つて之等の人々を顧みることが、寧ろ甚だ自然であること云ふまでもないのである。

更に當時の歴史に於て、我々はコペルニクス學說に對する宗教教徒等の異常な反對壓迫

を見出だすのである。眞理に對する正當な理解を以て之を祖述したところのガリレイが却つて彼等から異端視せられ、不當な宗教裁判を受け、そして彼の老いた晩年を不遇な境遇に於て過ごさねばならなかつたことを想ふと、我々はまことに涙ぐましさを感じないではゐられない。ケプラーもまた事實を科學的に探究した後、當然にコペルニクスの學說に左袒せざるを得なかつたのであるが、併し當時彼の名聲はイタリヤに於けるガリレイに比べて、一般にはさほど擴がつてゐなかつたし、且つまた彼は幸ひにも新教徒の間に置かれてゐたので、頑迷なジュースイト教徒等と直接に争闘することを免がれたのであつた。たとへローマに於ては彼の著書はガリレイの著書と共に永く頒布禁止の書目中に載せられてゐたと云へ、その生活の上にはそれ程烈しい干渉壓迫を受けずに済んだことは寧ろ彼の僥倖でもあつたのである。

ガリレイに比べてケプラーは即ち或る意味で幸運でもあつたのである。しかもケプラーがコペルニクスの學說を實際に惑星について検討し、遂にその著名な運動法則を見出だしたといふことは、科學史上に特筆せらるべき事からでもあつたのである。當時に於てガリ

レイの多くの力學的研究と相並んで、ケプラーのこの天文學的研究は、實に自然科學が自然に於ける事實記述として發展すべき端緒を形づくつたものと見なしてもよいので、この點で我々は特に重要視する必要があると信ずる。次に彼の生涯とその業績の大要とを述べて見よう。

二

ヨハンネス・ケプラーは一五七一年十二月二十七日ドイツのヴェルテンベルグに於けるワイルに於て生れた。彼の父は屢々戦争にも参加し國外までも赴いた人であつたが、後には生活にも困窮して僅かに小さな飲酒店を開いて過ごしてゐたことである。ヨハネスは、幼時には病身であつたので、小學校の教育も十分には受けることもできなかつたが、それでも生來優れた頭腦をもつてゐたので、殊に數學には秀でてゐたさうである。十四歳になつた頃にマウルブロンにある僧侶の學校に入つたが、常に成績優等で、従つていつも貸費を與へられて學費にも困ることなく、後テュービンゲンの大學に入つて之を卒業

した。

ところが、この大學に數學及び天文學を教へてゐたメーストリンと云ふ學者があつた。この人は始めて月光を日光の反射によつて起ると説いたのであつたが、能くケプラーを教導して、それによつて彼の興味を天文學に向はしめたのであつた。彼の後年の仕事は即ちこの教導に基づいてゐると云つてもよいのである。ケプラーは一五九四年にこの大學を卒業したのであつたが、その後貸費學生としての義務を果すためにグラーツに於ける福音學校に赴任し、そこで數學の教授となつた。その傍ら彼は占星學をも擔任した。實際にこの時代までの天文學は寧ろ占星術を主としたものなのであつて、すべての天文學上の知識は單に之がために必要であるとせられてゐたのであつた。併しケプラーの心に潜んでゐた自然科學的眞理に對する欲求は固より占星の奧義よりもより多く天體に關する事實そのもの不思議を解かうとするにあつたのである。又彼は生活上の一方便として占星學を講じなければならなかつたので、それでもこの機會を利用して彼はかやうな迷信を一掃することに努めようとも考へたのであつた。

一五九六年に彼はその最初の著書として、「宇宙の不思議」を著した。之は恩師メーヌトリンの賞讃を受けたばかりでなく、彼の先輩としてのガリレイ、並びに當時の天文學者として有名であつたティコ・ブラーへの注目を惹いた。彼は自身がその本當の道に歩み出したのを満足に感じたのちがひなかつたので、その際メーヌトリンに宛てて送つた書簡のなかに、「最良の恩師よ、あなたは私の原野を豊饒にする河川の源泉であります」とも記されてゐた。

翌年彼はバーバラ・ミュルラー嬢と結婚して、その後二人の兒を得たが、やがて不幸にも天然痘の流行により失つてしまつた。それと共に當時に於ては宗教改革に對する反動が高まつて、新教徒の同僚は悉く退職させられる不運に出遇つた。ケブラーも亦當然にこの仲間に數へ入れられたのであつたが、併し天文學に於て彼に代るべき人を見出だされなかつたので、僅かに退職を免がれたのであつた。併し當時のジュネイト教徒等は、いろいろな手段を講じて彼の排斥を行はうと圖つたので、それらの事情から彼は別に職を求めようとして、その時ブラーグに赴任して來たティコ・ブラーへの許にその斡旋を依頼した。この

結果として彼はブラーへの助手としてモルダウに於て就職することになつたのであるが、併しそこでは帝國天文學者としてのブラーへの貴族的な且つ威壓的な態度に對してむしろ不快を感じたばかりでなく、經濟上にも頗る不安を経験せずにはゐられなかつた。彼がメーヌトリンに訴へた書簡によれば、豫定の俸給額はかなり良かつたのに拘はらず、實際にそれがまるで支拂はれないこともあつたので、いつも困つてゐたと云ふことである。

ケブラーがティコ・ブラーへの助手となつたのは一六〇〇年のことであつたが、その翌年にブラーへは病死してしまつた。そしてそこに遺されたブラーへの多くの觀測記録がケブラーの手に委ねられるに至つたのは、彼にとつて實に思ひがけない幸ひであつた。なぜなら、之等の記録は當時としては恐らく最も精密なものでもあつたし、また他方でケブラー自らは元來近眼であつたばかりでなく、幼時天然痘を病んだことにより角膜を損じて視力を弱めてゐたので、肉眼による天體觀測などは到底でき得なかつたからである。彼は自ら「一つの弦月の代りに無秩序に十箇も並んでゐる形相が見える」とも述べてゐる程で、従つて實驗的觀測などは殆んど不可能であり、また好みもしなかつたのである。彼が後に有

名な惑星運動の法則を見出だし得たと云ふのも、つまりはブラーへの観測記録を手にする
ことを得たからであり、この意味では最初ブラーへの許で不満足を感じた彼も、やがて彼
に感謝すべき所を見出だしたのちがひなかつたのである。

併しケブラーがその正しい結果に到達するまでには、更に異常な努力と苦心とを必要と
したのであり、そこに彼のすぐれた才能の發揮がなければならぬのであつた。彼は一六
〇九年になつて漸くその論著をハイデルベルグで出版することができたが、之には「ティ
コ・ブラーへの観測による火星運動の研究から取り出された新たな天文学」と題せられて
ゐる。

一六一一年に彼は妻バーバラを失つた。なほまたブラーグに於ける彼の地位は依然とし
てそのまゝであつたので、リンツに赴いて數學教師の職を求め、一六一二年から一六二六
年までの十五年間をそこに過ごした。この期間に彼は諸方を旅行したり、また彼の母が魔
術者として審問を受けたのに對して辯護に赴いたりした。更にスザンヌ・ロートリンゲル
と再婚して、後にその間に七人の子を擧げるに至つた。一六一八年には、彼の他の重要な

論著「コペルニクス天文学拔萃」を出版し、翌年「世界の調和」を公けにした。一六二六
年になつて彼の法則に基いて計算したルドルフ表なるものを印刷出版するためにウルムに
赴かなくてはならなかつたので、家族をレーゲンスブルグに移し、單身でウルムに到り、
翌年その表を出版した。

かやうにして彼の仕事は漸次進んで行つたが、家計は依然として苦しかつた。彼に對す
る未拂の俸給額は積もるばかりで、遂に之を請求する見込さへ立たなくなつた。そこで偶
々之に對して骨折つてくれたフリードリッド公ワルレンシュタインの招聘に應じ、サガン
に赴いてそこで仕官するに至つたが、元來公の意志はケブラーをして占星を行はしめよう
とすることにあつたのに拘はらず、ケブラーはそれを熱心にはなさなかつたので、暫らく
して彼に對して無頓着に過ぎすやうになつてしまつた。併しその後になり彼をロストック
の大學教授に推薦したのであつたが、ケブラーは以前の俸給未拂に對する請求をそのまゝ
見棄て、しまふことも残念に思つたので、却つてこの推薦を辭退して、一六三〇年にレー
ゲンスブルグの議會に出かけた。ところが途中を急いで、無理な乗馬旅行を續けたので、

その過勞によつて不幸にも重病に陥ち入り、遂にその年の十一月十五日に彼の生涯を終へるに至つた。

想へば貧困のなかに生れ、そして遂に物質的には最後まで恵まれずに逝いたことは、彼のために悲しむべき事情であつたし、殊に終りには、その生活上の資を確實に手にしようとして、遂にその途上に病ひに仆れたことなどを懷ふと、まことに彼のために同情の涙を禁じ得ないのである。彼に對する未拂俸給額は實に一萬六千グルデンの巨額に達し、彼の死後に至つて漸くその遺族に交附されたと傳へられてゐる。併しながら彼の遺した業績が恐らく永遠に科學史上に輝かしい光りを放つて讃仰せられてゐることを思ふならば、彼もまた安んじて十分に瞑すべきであらう。こゝに科學の不朽な生命が存するのでもある。

三

ケプラーの業績を述べようとするに當つて、私は之に最も深い關係のあるティコ・ブラーへの事蹟をこゝに併せて語らないわけにはゆかない。

ティコ・ブラーへはデンマークの貴族の出であつて、一五四六年にクンドストループに生れ、叔父のジョージ・ブラーへの家に養子となつた人である。最初は法律を學ぶためにコーペンハーゲンの學校に入つたが、偶々一五六〇年八月二十一日の日食に出遇ひ、それが曆書に記された月日と一致することに驚き、始めて天文現象に多大の興味を惹き起して竊かに自分で星の觀測などを行つて之を研究した。その後ドイツに遊學して、ライプツヒ、ウィッテンベルヒ及びロストックなどで天文学を研究し、また鍊金術をも學んだ。彼は生來非常に負けず嫌ひの我の強い性質をもつてゐた。之は彼の學問に對する勉強をも人並み以上にさせたけれども、同時に他人に對しての争鬭をも屢々敢行させた。ロストックに留學してゐた際に遂に或る學生仲間と決鬭を行ひ、その際鼻の上部を切り落とされたので、その後鍊金術を應用して銅と銀との合金で鼻の形をつくり、その色までも皮膚に似せて、之を附着してゐたと云ふことである。

一五七〇年にコーペンハーゲンに歸つた頃にはこの鍊金術に熱中してゐたが、一五七二年の十一月十一日にカシオピア星座に新星が現はれたのを、夕食に家に歸る途すがら眺め

て、再び天文學への強い興味を刺戟せられ、爾後専らその研究に耽るやうになつた。ところが彼が以前に遊學旅行をしてゐた間に互ひに知り合つたヘッセン・カッセルの伯爵ウィルヘルム四世が當時のデンマーク國王フリードリッヒ二世にこの事を薦言したので、國王は特にブラーへのために天文臺を創設することに同意し、尙ほその研究を行はしめるために多額の年俵をさへ與へることとした。この天文臺はゼーランドの北方にあるヒューン島に建設せられ、「天空城」と名づけられた。彼は一五九七年までそこにあつて、多くの助手と共に熱心に天體觀測を行つた。只惜むべきことには彼の生來の争鬭癖が祟つて屢々不快な事情を醸し彼に従屬するヒューン島の農夫の間にすら多くの不平を生ずるに至り、終にその結果として彼はその壯麗な天空城を立ち去るべく餘儀なくされた。そして暫らく諸方を旅行してゐたが、二年後にボヘミア皇帝ルドルフ二世に招かれてブラーグに赴き、そこで一六〇一年に逝いたのであつた。

ティコ・ブラーへの天體觀測記録は當時に於ては驚くべき精密さをもつてゐた。コペルニクスが自分の學説を證明するために引用した星の位置は恐らく角度に於て十分以内の精

密さをしかもつてゐなかつたのに反し、ブラーへに於ける精密度は遙かにそれより進んで居り、大體に於て一分乃至二分以内の誤差を含むに過ぎなかつた。ブラーへはかやうな觀測の結果に基づいて、コペルニクスの學説を検討したが、すべての惑星が太陽のまはりに圓運動をすると云ふことの必らずしも正しくないことを確かめた。この事實と、並びに太陽中心説が聖書の記録と矛盾するといふ當時の喧ましかつた問題とは、遂にブラーへをして次の如き説を稱へしめるやうに導いた。即ち彼は惑星が太陽を周廻することを大體に於て認めるけれども、之と同時に太陽は月と一切の恒星天と共に地球を廻るのであるとしたのであつた。惑星のうちで彼は特に火星の軌道が他と異なることに注目し、之について詳細な觀測を行つたのであつた。水星と金星との軌道半徑は太陽の軌道半徑よりも小さく、その他の惑星のそれは後者よりも大きい。それ故彼の見解によれば、之等の軌道がすべて圓であるとしても、惑星はそれ自身動いてゐる太陽の周りを廻るのであるから、火星の軌道と太陽の軌道とが互ひに切り合ふことがあつても決して矛盾ではないと云ふのである。彼がこの學説を形づくつたのは、一五八三年であつたが、一五八八年に出版された著書の

なかでこの事を詳細に論じたのであった。

ブラーへの説は、このやうにして全く表面的にはコペルニクスの説に反するやうに見える。後者によれば地球が二十四時間をもつてその軸のまはりに一廻轉するわけであるが、ブラーへは、若し之が事實であるとしたならば、或る高い塔の上から落した石は塔の足から遙かに離れた場處に落ちなければならぬであらうと論じ、また海水や空氣が地球と一緒に動いてゐる筈であるが、その運動は少しも感じられないし、更に我々が毎日頭を倒さにして立つなどと云ふのは全く不可能であるとして、之を批難した。當時にあつては之等の疑問もまた無理とは云はれなかつたのであらう。それにも拘はらずブラーへの新説はその本來の意味に於ては、決してコペルニクスの説を否定して之を單なる地球中心説に戻さうとするものではなかつた。否、寧ろコペルニクスが尙ほ甚だ不十分であつた觀測を用ひて太陽中心説の假定を立てたのに反して、之をより多く、より精密に事實に合致せしめようとして試みたのに外ならない。天文学の問題は之を我々の思辯臆説によつて解くわけにはゆかないので、却つて天體それ自身の答へる處のものを我々が探さなければならぬのであ

つた。そしてこれこそ我々の自然科学の眞精神に外ならないのである。只ブラーへに於ては、後にケプラーが之から本當の解答を引き出し得た際に用ひた數學の鍵を缺いてゐたので、その代りに誤まつて聖書違反の大聲に左右せられてしまつたのであつた。併しブラーへの之等の觀測なしにはケプラーも亦何ものをも求め得なかつたであらうことを想ふならば、それが同様に重要視せられなくてはならないことを認めるに足りるであらう。

四

ガリレイと共にブラーへやケプラーに於ては既に自然の事實を重んじて、専ら之に依らうとする科學的精神が十分に眼醒めてゐたとは云ふものの、なほ當時に於て古代思想の影響から全く離れることのできなかつたのは止むを得ない事からであつた。ブラーへが聖書に矛盾することを避けようとして、太陽をして地球を周廻せしめようとしたのもその一例であつたし、またケプラーがその研究の最初にあつては天球に於ける調和的關係を専ら求めようとしたのも同じく之に屬する。